

產政塾

VI

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである

目次

• 産政塾Ⅵの発刊によせて	産政塾 塾長	梅村 志郎	1
• 今日の雑感			5
• 企業における人間性	丸柴労組	林 恭 吾	13
• 「プロセスを楽しんで生きてゆくこと」	中部電力	竹内 秀 明	19
• 格闘がいまから始まる	トヨタ車体	近 藤 均	27
• 私の「アルト・ハイデルベルグ」	アイシン労組	光 岡 博	33
• 『Calm down』	日本電装	向 井 克 之	39
	トヨタ自動車	説 田 公 人	

『本質を見つめる眼』	45
------------	----

ヨットはなぜ風に向かって走れるか？	51
-------------------	----

トヨタ自動車労組	高橋 誠	57
アイシン精機株	本田 武志	57

Dream a little dream	65
----------------------	----

豊田合成株	伊藤 裕章	71
俺の人生を誓う	名古屋鉄道株	大島 秀一

「思うこといろいろ」	79
------------	----

森 晴哉	87
日本電装労組	横田 晴充

榊東海銀行	桑山 完治	93
出会いはわが財産	中部電力労組	101

「自分のおやじ」から「自分がおやじ」へ	101
---------------------	-----

・親への製造物責任法適用についての試案	佐宗正典	107
・アメリカ10日間の旅	勸中部産政研 十亀義則	115
・香港 ポスト一九九七年華南経済圏を訪ねて	勸中部産政研 願興寺 皓之	125
・産政塾活動記録		129
・あとがき		136

産政塾Ⅵの発刊によせて

(財) 中部産政研 理事長

梅村 志郎



梅村 志郎（うめむら しろう）

昭和2年	愛知県小牧市生まれ
昭和16年	トヨタ自動車工業株式会社 入社
昭和41年	全国自動車産業労働組合連合会 中央執行委員を始まりに
昭和46年	トヨタ自動車工業労働組合 執行委員長
昭和57年	全トヨタ労働組合連合会 中央執行委員長，全日本自動車産業労働組合総連合会 会長代行などを歴任
昭和61年	全トヨタ産業政策研究会 理事長を経る
昭和63年～	財団法人 中部産業・労働政策研究会 理事長専任
現 職	全トヨタ労働組合連合会顧問，中部生産性本部顧問

〈趣味〉……健康とボケ防止のゴルフとマージャン

〈好きな言葉〉……誠

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、この度第六期を終えた。

産政塾は、異業種の若者十数名に参加してもらい、約一年間に亘って行うセミナーである。

セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルではない。参加したメンバーが、自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向して体験や教えを請うという活動を通して、学ぼうとするものである。

また、産政塾は異業種の人達の集りであり、多様性を取り入れた論争の場でもある。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーを生み出そうとするものである。

こうした活動を通して、参加者は自らの考えを検証し、自分自身の存在や役割を自覚するという、言うなれば自らを磨く道場といったものである。

人間形成の基本の時期は青春期であるといわれているが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいといえる。一応仕事にも慣れ自分で判断できる能力もできつつある。精神的にも肉体的にも充実しており、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活動する時期である。

今回、産政塾に参加した人達は三十才前後の若者十六名である。意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集りになった。

こうした若者達の集りである産政塾は、約一年間に亘ってお互いが夢を語り、自らの企画によって

その実践に情熱を注いできた。そしてこの度セミナーを終了した。

このセミナーを通じて、参加者一人一人が新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信している。

この冊子は、第六期生がセミナーを通して得た様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマソと呼び」として綴ったものである。ぜひご一読願いたい。

産政塾は極めて小規模の催しであり、参加してもらうのは限られた人達である。したがって、こうした冊子を通して一人でも多くの人達の共感を呼ぶことができればと思って発刊をした次第である。

塾生と同世代の人達の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとっても参考になることが多いと思う。

なお、産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師をはじめ関係各位に感謝を申し上げると共に、産政塾および塾生に対して今後共ご指導・ご声援を賜わることができれば誠に幸いである。

平成七年十一月

産政塾 塾長 梅村 志郎

今日的雜感



丸栄労働組合

林 恭 吾

〔プロフィール〕

はやし きょうご (38歳)

- 1957年 8月11日 豊橋市に生まれる
- 1978年 3月豊橋丸栄入社 営業統轄部
催事課
その後、販売促進部営業企画課を
へて
- 1993年 9月丸栄労働労働組合専従となり、
現在に至る

〈家族〉 妻、子供2人

〈趣味〉 スポーツ全般

〈モットー〉 やればできる!!

一、思考回路（ブレインワーク）

・ベルリンの壁の崩壊と共に終焉した「東西冷戦構造」

・最大野党であった社会党が自民党と手を組んだ、自・社・さきがけによる「連立与党」

・蛇口をひねれば出たはずの水が節水の為に出不い「異常渇水」

・この地域には地震はないと過信していた「阪神大震災」

・いつものとおり地下鉄に乗っただけなのに死亡者が出てしまった「地下鉄サリン事件」

・絶対大丈夫と言われていたにもかかわらず破壊してしまった「兵庫銀行」

今まで我々が常識としてきた「尺度」では思いもよらない様々な出来事。ざっと挙げただけでもこれだけある。それだけ今の世の中の予測がしにくいと言うことなのか？或いは従来の「常識」とは異なる新しい「常識」による「尺度」が必要なのか？

ところで、我々が普段口にしてゐる「常識」とは一体何なのだろう。広辞苑によれば：「普通一般人が持ち、また持っている標準知力。専門知識ではない一般的知識とともに理解力、判断力、思慮分別などを含むとある。

一般人の標準知力とは、我々が学校教育で受けて来た知識の事だとすれば、今のような従来の「常識」が通用しない世の中では、学校教育の内容自体の見直しをしなければいけないのだろうか。

それでは角度を変えて、「非常識」とは何だろうか？常識でないことであるとするならば、その時代の常識で量られないことはすべて「非常識」となる。勿論その時代によって常識、非常識は変化して

いくものである。例えば、アインシュタインの相対理論も発表された当時は、奇人変人扱いされたと聞く。もっと遡るならば、ガリレオガリレイしかり、コペルニクスしかり、現在の知識からすれば、常識とされていることが、非常識とされてきたのである。

世紀末の現在、変革の時代とか混沌（カオス）の時代とか言われている。世の中が変わっているのは肌で感じるようになった。ましてイノベーションによって、通信網が発達し、地球の裏側で今日起こった出来事が、そのまま伝わるような距離的、時間的な隔たりが無くなってきている。このような時代には、共通観念とか共通認識が必要とされてきているのである。

今までは、その地域の、あるいはその国の「常識」で判断をしていればよかったものが、いまは共通の「常識」つまり共通の「尺度」で判断しなければ、摩擦が起きる。東西冷戦構造が崩壊した今日そのウエイトはますます増している。

分かりやすく言えば、日本での常識が決して国際的な常識とは限らないと言うことである。諺に「井の中の蛙、大海を知らず」とあるが、国際社会で生きて行くには、常識を合わせることが必要である。新聞紙上を賑やかした日米の経済摩擦も、一つにはこの「尺度」の違いがある。

二、国際化（コクサイカ）

次に国際化について少し触れたいと思う。日本では何かと「国際化」と言われるが、英語で言う「グローバル」も「インターナショナル」も我々はすべて「国際化」としているが、本来は違うはずである。

国際化社会での競合でのそもそものつまずきがこの部分である。相手に正確に物事を伝えるツールは「言葉」であるが、その言葉の使い方がまちがっていけば、解釈で相違がでるのは当然である。外国語を覚える過程でのことであるが、例えば英語を覚える際に、最初のうちはいったん、日本語に直してから考えるものが、徐々に英語で考えるようになるのである。言葉で表現すれば簡単なことだが、この違いは根本的に大きい。「郷に入らずんば、郷に従え」ではないが、国際社会での所謂、共通言語が「英語」であるのならば、まず英語が話せること、そして英語が分かる（理解できる）ことは必須条件と考える。回りが「英語」で考えているのに、一人だけ「日本語」で考えていたのは取り残されてしまう。

義務教育の段階から、卒業すれば完全に「英語」が話せるようなカリキュラムを真剣に考えないと、ますます国際社会に取り残されてしまう。

次に先ほども触れた「尺度」について考えたいと思う。先日講演を聞きに行ったときのことであるが、その中で戦時中の憲兵隊長の話があった。内容は、憲兵隊長以下憲兵隊がインドシナのある島に派遣され、終戦を迎えた。本来ならば憲兵隊は戦犯として裁かれ極刑とされるところを、現地の島民からの嘆願により極刑を免れ、本土へ引き上げたとのことであった。当時としては考えられない事であるが、極刑を免れた憲兵隊長によれば「我々は、国際協定により捕虜を扱っただけであり、特別の事を行ったわけではない」とのことであった。しかしながら、島民もそして外国人捕虜も、お互いが認める共通の（尺度）ルールに基づいてフェアに行動をしたこと憲兵隊長と隊員を、敵国の軍隊でありながら、フェアに裁いたわけである。この逸話からも、いかに国際ルール（尺度）が重要か理

解できると思う。

国際社会で必要なことは、共通のルール（尺度）作りとルールを守ることである。学校教育で得ることが「常識」であるのなら、国内の事だけではなく、国際的なルール（尺度）を理解させるためにも、国際的な「常識」も知識として必要ではないだろうか。国際社会の中の日本と言う見方ができないと、つまり世界の「常識」での尺度で日本を計らないと、おかしい方向へ進んでしまうと言うことだ。……次の世代へ期待をしたい。……

三、環境問題（アジアの中の日本）

先日、四日市で開催された中日新聞本社主催の「アセアンの集い」へ参加をした。アセアン七カ国の代表者と未加盟の二カ国そして一国際関係機関による参加で、ホスト国の日本も含めれば、十カ国の政府代表者が参加しての集いであった。その中で、アセアン諸国から日本に期待することが話され、アセアンの中で日本が果たさなくてはいけない役割の重要性を改めて認識をした。

アセアン諸国から見た日本は「アジアで唯一西側先進諸国の仲間入りをした工業国」との認識であった。そして日本へ期待することは、技術指導や資金援助といったことが多く挙げられ、政治的なリーダーシップを望む声よりも、多かった感がある。現在の我が国の政治不安を物語ったものであろうが、アセアン諸国と日本の間で共通の尺度で図られているかは心配である。

国際社会、特にアジアにおける日本のポジショニングを明確にし、認識したうえで物事を判断する必要がある。我が国の人間が、はたしてどれだけアセアン諸国の事を理解しているだろうか。これか

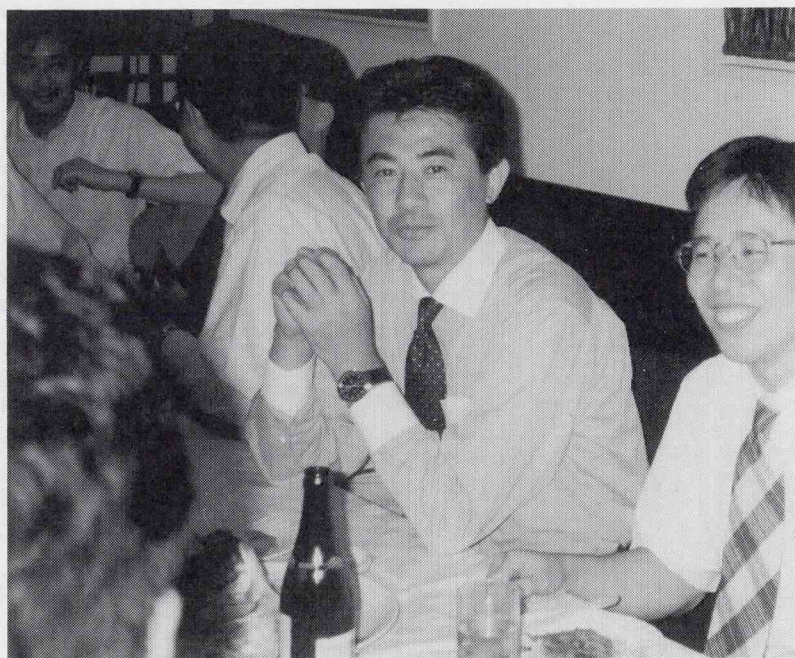
ら付き合わなくてはいけない国の情報を、どれだけ把握しているだろうか。あるいはマスコミはどれだけ正確に伝えているだろうか。国内のたわいも無い話題だけを取り上げて肝心の話題をないがしろにしていけないだろうか。戦争責任の問題が取り上げられるが、学校教育で本当に正確に教えられるのか。この問題はアセアン諸国と付き合う上で特に重要な部分となる。学校教育で習わないことは、その場ですぐには理解できない。アセアン諸国ではこの問題は学校教育でしっかり整理をしている。弱腰の日本と違う点はそこにある。

少し話がそれたので修正をすると、現在、アセアン諸国は目覚ましい勢いで発展している。特に工業化の波はすさまじく、それと共に問題になるのが「環境破壊」の問題である。アセアンの集いの開催地が、我が国の昭和四十年代の高度成長期で、石油コンビナートに代表され、公害の代名詞でもあった四日市での開催ということもあるが、「環境」の問題については比較的先進的な諸国から問題提起がされた。

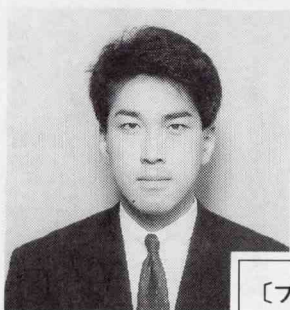
世界的にも環境問題は取り組みがされてはいるが、それは特に先進諸国間の問題であり、発展途上にある国々からは、発展を妨げるとして反発もあった。しかし、環境の破壊は着実に進展し、オゾン層の破壊と、森林伐採による砂漠化の問題は深刻である。

我が国が、アセアンのなかでリーダーシップを取って行かなければならないのはとりわけ、技術援助の中でもこの分野の事ではないだろうか。我が国で起こった失敗を二度と繰り返さないためにも、そして先の対戦で我が国がアセアン諸国にかけた迷惑に報いるためにも、いまこそ国を挙げて取り組むべきである。

最後に、我々が戦後五十年と一口に言い、過去に決別しようとしているが、アセアン諸国ではまだ戦争の後遺症は続いている。すべての国民が過去の歴史を真っ正面から受け止めているのである。産政塾の後輩に願う、一度日本の戦争責任について話し合いをしてほしい。



企業における人間性



中部電力㈱ 人事部

竹 内 秀 明

〔プロフィール〕

たけうち ひであき (30歳)

- 1965年 三重県松阪市生まれ
- 1988年 中部電力㈱入社
(名古屋支店北営業所)
- 1990年 岐阜支店総務部人事課
- 1992年 本店企画室
現在に至る

〈家族〉 只今独身

〈趣味〉 ドライブ、スキー

〈モットー〉 楽しく生きる

企業の行動

私は、学生時代、経済学部に在籍していた。当然のことながら経済について学んだはずであるが、他の多くの学生同様（？）、勉強とは縁遠い存在であった。したがって、その後の人生において、「経済学部の出身ですか」と聞かれるたびに、ドキッとしなければならぬ状況に置かれている。しかしながら、このような私でも、ミクロ経済学における経済主体として「企業」という概念があったことはおぼろげながら覚えていいる。そして、この企業は、常に利潤を最大化するよう行動するというのも何となく記憶の片隅にある。

さて、無事に大学を卒業し、企業なるものに就職したわけであるが、そこで企業の行動として今まで私の知り得なかった行動があることが分かった。企業というものは常に経済性を追求するように行動するものであると考えていた私にとって、企業の人間性というものが論じられていることを知ったときは非常に新鮮に感じられた。

企業の人間性

企業における人間性とは、何であろうか。

それは、人間および人間が生活する社会への配慮であり、経済性とは無縁のものであると考える。具体的には、

① 地球環境問題への対応

② 社会貢献活動への取り組み等である。

日本の企業は、これまで、経済性を追求することによって、社会的責任を果たしてきた。すなわち、安価で良質な商品・サービスを提供するため、消費者のニーズを的確に把握して、よりニーズの高いものを生産するよう心掛けるとともに、限りある資源のうち豊富で安い資源をより多く調達し、その資源からより大きな効用を生み出すよう効率的な生産・流通活動を行ってきた。そして、このような基本的な企業活動を実践することによって、世界でも類を見ない高度な経済成長を成し遂げることができた。

また一方で、企業は、経済性を追求していく過程において生じた弊害に対して、社会的責任を果たさざるを得なくなった。日本経済は、高い経済成長を実現し、大きな成果を得ることとなったが、それに伴って、膨大な汚染物質や廃棄物を社会に放出することとなった。いわゆる公害である。モノをつくる過程で発生する硫黄酸化物や窒素酸化物による大気汚染や有機物質による水質汚濁などが問題視され、企業の生産活動に対する批判が高まることとなった。つまり、企業に対して、それまで忠実に実践してきた生産至上主義を見直し、社会に及ぼす悪影響を排除することが求められたのである。そして、企業は、程度の差はあれど、今日までこの社会的責任を果たすための努力を重ねてきているのである。

ところで、近年、企業の行動として、このような経済性の追求、あるいは、それによって生じたゆがみに対する是正の努力などとは一線を画して、前述した人間性を追求する行動が注目されてきてい

る。

地球温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊などを典型的な例とする地球環境問題は、現代におけるあらゆる生活・生産様式そのものに端を発しているとともに、特定の国や地域の環境を越えて地球全体の環境に影響を及ぼすという特徴を有しているため、個々の企業からみれば、それに対応するインセンティブが働きにくく、一企業だけが生活・生産様式を退行させることによって、正直者が馬鹿をみるということにもなりかねないものである。また、企業の生産活動との因果関係が必ずしも明確ではないため、それへの対応は、公害をはじめとする今までの地域的な環境問題への対応とは明らかに異なり、不確実性の下で行っていかねばならない。

また、社会福祉活動を中心とするフィランソピーや文化支援活動であるメセナなどに代表される社会貢献活動は、ご存じのとおり、国際化の進展に伴い、米国社会の伝統である「良き企業市民」という考え方が持ち込まれたものであり、企業も社会を構成する一市民であるという認識の下に行動することを求められたものである。そして、この活動は、企業本来の活動（経済性の追求）を越えたところで行われるものであり、広く社会との協調・調和を図ることによって、社会的責任を果たそうとするものである。

人間性と経済性

企業の新たな行動、すなわち、経済性の追求とは異なる人間性追求の例示として、地球環境問題への対応と社会貢献活動への取り組みをあげたが、これらは本当の意味での人間性を追求する行動なの

であらうか。

企業は、株式会社である以上、株主に対して企業の経済性を高めるといふ責任を常に有しており、その行動が、企業活動の一部として行われるのであれば、株主の利益を無視するといふことはできないはずである。したがって、企業における人間性の追求は、社会に対する博愛・慈善の精神に基づいて行われるべきものではなく、企業にとって何らかのプラスの価値、すなわち、経済性の向上をもたらすべきものであると考える。

実際、企業が人間性を高めるといふことに注目しはじめたのは、「企業が社会貢献や地球環境問題に取り組むことは社会的責任である」という新たな社会の意識を的確に捕らえ、こういう時代においては、人間性を高めることで追加されるコストは回収が容易であり、長期的にみれば何らかの利益につながると判断したからではないだろうか。あるいは、人間性を高めることに背を向けることは、経営戦略上得策ではなく、それを利用することが社会に受け入れられるための近道であると判断したからではないだろうか。

このような企業の行動は、当然容認されるべきものであり、逆を言えば、経済性につながらない人間性の追求は行うべきではない。人間性を追求する以上は、企業として何らかの見返り、例えば、企業イメージの向上とか従業員のモラルの向上といったものを（戦略的に社内外に表明するか否かは別として）期待し、獲得すべきである。このような意味から、企業における人間性の追求は、経済性追求の一要素に他ならず、本来の意味での（無償の）人間性は存在し得ないと考える。

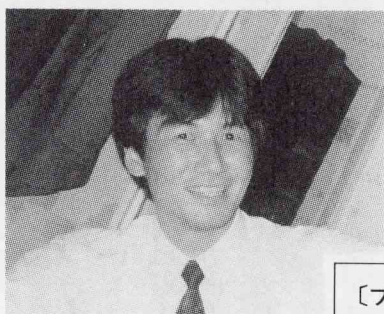
経営と労働組合

とは言うものの、入社した当時、企業の人間性を追求する行動に対して新鮮さを感じていた私にとって、本当の意味での人間性が企業に存在しないということは、非常に寂しいことである。

そこで、敢えてその存在を見出だそうとするならば、一部の経営層にのみ与えられた権限の中に見出させるのかもしれない。判断が誤っていないとの前提の下に、企業が経済性を追求することによって導き出された結論と一部の経営層の裁量の下に実際に行われる施策との差、これが企業における本当の意味での人間性なのかもしれない。

そして、従業員の生活に対する配慮も人間性追求の一つであるとするならば、労働組合は、経営層が経済性追求の下に判断する結論を誤らないようチェックするとともに、より高い人間性を獲得するために、経営層の裁量に訴え掛ける存在であるのかもしれない。

「プロセスを楽しんで生きてゆくこと」



トヨタ車体㈱ 購買部

近 藤 均

〔プロフィール〕

こんどう ひとし (37歳)

- 1958年 愛知郡長久手町生まれ
 - 1982年 トヨタ車体㈱入社
人事部労務課配属
 - 1985年 購買部へ (資材購買を担当)
 - 1992年 購買企画を担当
現在に至る
- 〈家族〉 妻・長女 (2才) ・義母
- 〈趣味〉 自転車、読書
(読書は人物に関するものが多い)

一、プロローグ

昨年の十二月からスタートした「第六期産政塾」もはや十ヶ月余が過ぎ、卒業論文を書かなければならない時期がとうとうやってきました。楽しいことは早く終わってしまうのが世の常なのですが、この産政塾も楽しんでるうちにあっという間に過ぎてしまったような感があります。

思えばその間には計七回もの会合があり、各方面でご活躍の講師の方々にも恵まれ、彼らの熱っぽく機知に富んだお話に触れることができました。私にとってはいろいろ考えさせられることが多かったと感じています。

そこで、私は開塾式と閉塾式の会合での共通テーマであった「二十一世紀を考えること」を踏まえ、今後の自分の生き方について、少し過去をふり返りながら考えていくことにします。

二、最近よく考えること

私はこの産政塾に参加するながで三十七才になりました。この年令は日本人の平均寿命でいうとちょうど半分であり、またマラソンに例えるならば選手がちょうど折り返し地点にさしかかっているところかといえるでしょう。しかも、私は今年の七月にマイホームを新築し、二十五年間の借金生活に突入したところでもあります。

このようなシチュエーションに立ってみますと、私ばかりではないと思いますが、人間はともすると何か目標というものを見失いがちになるように思います。つまり、今までは「大学に進学する」「就

職する” “結婚する” “子供をつくる” “家を建てる” など、それぞれの年令、年代において自然と与えられた身近な目標に向かってつき進めばよかったのですが、家を建てた今、ふと自分自身についてふり返ってみても次なる身近な目標が見えてこない自分に気づき始めたのです。

確かに、会社でえらくなるとか、地域活動に貢献し交流を深めるとか、ボランティア活動に積極的に参加するとか、おぼろげながら願望に近いかたちでいくつかの目標のようなものは見えてきますが、それらが自分にとって本当の目標かどうか確信がもてないでいます。なぜなら、自分がそれらを自分にとつての “あるべき姿” と考えていないからだと自己分析しています。

となりますと、自分のあるべき姿を何におくかが非常に重要になります。ここ数年、私が考え、追求しつづけた “あるべき姿” とは、いわゆる望ましい姿なのであり、それは特別なことではなく、ある種哲学的で普遍的なことではないかと思つてます。今の私の言葉でいうと、 “人間らしく生きてゆくこと” ではないだろうかと考えます。これは、今までのような身近で具体的な目標ではなく、長い期間をかけないと到達することができない目標だといえます。

自分が親の愛情を受けながら育ってきたように、自分も親として大きな愛情をもって子供たちを育てていかねばなりません。その際、子供には完全な親としての自分をみせようとするのではなく、よいところもあればわるいところもあり、また普段は正しいことを言うがたまに誤ったことも言つてしまふような、ごく普通の人間らしい親の姿を正直にみせてやるのが親の役割だと思つています。

このように “人間らしく生きてゆくこと” は、長い時間をかけて子供の成長とともに考えていかねばならないことではないかと思ひます。そのためには過程すなわちプロセスを正確に見極め、それら

を大事にしていくことが必要ではないかと考えます。私がそう考えるに至ったところを、私の趣味をまじえ二つの例をあげて話を進めたいと思います。

三、プロセスを楽しむ——ツール・ド・フランス——

ところで、私の趣味はというと自転車に乗ることです。しかしそれは買い物に使うチャリンコのような類のものではなく、れっきとしたロードレース用の自転車なのです。変速用のレバーはブレーキのところに装備され、前輪のホイールはカーボン製であり、それだけで約十万円もする代物で、なまはんな自転車ではありません。

私が自転車に興味をもち始めたのは、確かNHKテレビで放送していた「ツール・ド・フランス」をたまたま観たのがきっかけだったと思います。このロードレースというスポーツは、日本ではまだマイナーなジャンルのもんですが、ヨーロッパではサッカーに次いで人気の高いスポーツとされています。

そのロードレースの最高峰に位置づけられているのが、毎年七月という暑い時期にフランス全土約四千kmを二十三日間かけて走破するツール・ド・フランスというステージレースだったのです。

このレースには、世界から選りぬかれた一流のサイクリストたちが集まり、一チームが九名の選手で構成され、全体で二十二チーム百九十八名の選手が参加します。しかも、このレースは、二十三日間の長い日程で争うわけですが、ゴールできる選手はスタート時点の約六割弱になってしまふという、苛酷なレースであるという一面ももっているのです。

各チームの監督は、エースを総合優勝させるために戦略を練り、エース以外の選手にそれぞれの役割を割りつけます。そして各選手はその役割に応じてエースを勝たせるためにサポートをするのです。例えば、平地での比較的スピードの速いステージでは、エースが先頭に立って走ると風の抵抗によってスタミナを消耗してしまうため、アシストの選手がかわるがわるエースの前方に立って走ることににより風よけの役割を果たします。また、勾配がきつく険しい山岳の昇りのステージでは、クライマーと呼ばれる山岳に強い選手がエースの前方に立って走り、ペースメーカーとしての役割を担い、エースが最後までトップ集団についていけるようにアシストしていきます。

このツールドフランスは、二十三日目のパリのシャンゼリゼ通りの最終ゴールまで全部で二十のステージに分けられており、その累計タイムの一番少ない選手が覇者となるわけです。その過程においては、各ステージでの勝利をねらう者、山岳賞をねらう者、スプリント賞をねらう者など、各選手の思惑はさまざまです。各ステージ毎にその日の勝利者とその日までの累計タイムの一番よい選手（マヨ・ジョーヌという黄色いジャージが与えられる）がそれぞれ讃えられるのです。

このレースで重要なことは、いかにして最終ステージが終わった時にこのマヨ・ジョーヌを着ていられるかなのです。つまり、このレースでは結果も重要視しますが、それらを保証するためのプロセスを非常に大切に考えているのです。各チームはライバルと目されるチームやそのエースを徹底的に調査研究し、その戦力を十分に分析した上で戦術を立ててきます。

従って、このレースでは各チーム同志や各選手同志が激しいかけひきを演じるわけであり、そこが最大の見どころであり、醍醐味を味わえるところでもあります。こういったところがヨーロッパで高

い人気を維持しつづけている理由でありましょう。

四、プロセスを楽しむⅡ ―フライ・フィッシング―

次に私の父の話をします。父の趣味は魚釣りであります。父によると、釣りも長年やっているが魚の心がわかるようになり、魚を釣り上げてもそのまますぐに逃がしてやるようになってしまったといいます。

それで思い出しましたが、釣りのなかにはキャッチ・アンド・リリースを基本とする「フライ・フィッシング」というゲームフィッシングがあります。これは、フライ（毛針）をキャスト（投げ）して淡水魚をおびき寄せ、ヒット（釣りがかり）させて釣り上げる方法です。餌をつかう釣りとは違って、職漁師の感じはないし、魚が針を飲みこんでしまうことも少ないため、魚へのダメージも少なくなります。従って、リリース（再放流）は魚が元気な状態でできるのです。

このフライフィッシングは、ヒットしたときの興奮と喜びが目的になっており、その釣り方は本物の餌をつかうのではなく、餌となる川の虫に似せた毛針をつかって魚をだまして釣るものです。

しかし、魚のほうだってそう簡単にだまされてはくれません。川の状態、そこに棲息する昆虫、羽化してゆく虫、天候など、そういった様々な条件を考慮しながら最適のフライを選び、魚を誘うのです。これはまさにかけひきで魚を釣ることにほかなりません。

これが、フライフィッシングが最も釣れない釣りといわれる所以なのですが、逆にいえば釣り上げるまでのプロセスを十分に楽しむことのできる釣りといえると思います。

五、プロセスを大事にする

ツールドフランスにしろ、フライフィッシングにしろ、最終的に結果が大事であることはもちろんなのですが、それによい結果に導くためのプロセスをきちんとおさえ、それらを保証していかない限り、ねらった成果は得られないのです。

これは、スポーツや趣味に限ったことではなく、私たちの仕事においても全く同じことがいえると思います。できるならば、結果ばかりを考え過ぎないよう、プロセスも大事にしてそれを楽しむ余裕を少しでももちたいものです。今後自分が生きてゆく上でこのように「プロセスを大事にし、楽しんで生きてゆくこと」が自分の人生の新たなページを開くために必要であると結論づけたいと思います。

六、エピソード

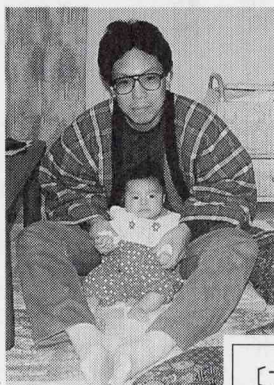
産政塾は仕事を離れたところ、つまり利害関係のないところで異業種の人々が集まって自由な議論のできる場であったと思っています。

急激に変化の進む社会の中で、よき企業人、よき社会人そしてよき市民であるために、私たちは今まで以上に努力をしていかねばならないと感じています。その意味で今回産政塾に参加できたことは自分にとって非常に意義があったと感謝しております。

産政塾で出会った人たち―梅村塾長、事務局の方々、講師の方々、それに個性のある同期生の面々

—とのつながりを今回限りのものとせず、今後もずっともちつづけることができればと願いつつ、次期産政塾の活動がより充実したものとなってゆくことを期待して結びいたします。

格闘がいまから始まる



アイシン労働組合

光 岡 博

〔プロフィール〕

みつおか ひろし (32歳)

- 1963年 富山県に生まれる
- 1986年 アイシン精機㈱入社
メカトロシステム開発部配属
- 1988年 電子技術部へ
- 1994年 アイシン労働組合出向
現在に至る

〈家族〉 妻 (直実)、娘 (彩加)

〈趣味〉 昔 車いじり、 今 娘

〈モットー〉 一所懸命

平成六年の後半から七年にかけて、世の中は予想しえなかった出来事が次々起こり、今までとは別な変化が起きつつあるように思う。オウム真理教の事件は言うまでもなく、銃による強盗・殺人、いじめや無抵抗の者への暴力など、その数や悪質さはエスカレートするっぽうである。阪神大震災はその警鐘を鳴らしているかのようにすら思える。とはいえ、それぞれの事故・事件で被害にあわれた方たちのことを考えると非常に心が痛み、ただただ早く立ち直っていただきたいと願わずにいられない。

一世一代の転機

長いようで短い人間の一生のうちで、転機は数回くるとある本に載っていた。転機といっても人さまさまである。自分の場合は①転職 ②結婚 ③かみさんの出産である。これが過去約一年の間に起こったことである。

① 転 職

技術者であったはずの私が、こともあろうに労働組合の執行委員になってしまった。ロベタで引っ込みじあんのこの私である。いままでは物言わぬ部品や図面と格闘し、どちらかというとオタクに近い日々を過ごしてきたが、これからは沢山ものを言う人間が相手である。さすがにためらったが、どんな仕事でも困難は同じようにあるし、全く別の世界を経験するのも今後の自分にプラスになるのではと割り切って引き受けた。やって良かったか悪かったかはまだわからないが、実感したことを一

つ。昔の部品や図面を相手にしていたときは、一十一は必ず二だった。今は、一十一の答えなんてあるわけがない。三や五のときもあるが、マイナスになることも・・・。そこが魅力かもしれない。

②結婚

かみさんと結婚したのが去年の十月。出会ってから一年もしないうちに結婚するという暴挙に、自分でも驚いている。私の性格は『石橋をたたいても渡らない』。たたいにいるうちに橋を壊してしまい結局渡らずじまいになるのが常であった。だから結婚に関しても「最低一年間は付き合って相手のいろんな所（良くも悪くも）を把握してから考えよう。一生の問題だ。あせつたらろくなことがない。」と慎重を期していたはずなのに何故だろう。ばれたら怒られるだろうが、とりたてて美人でも気だてがよいわけでもなく、ごく普通の女である。若いころ（？）思い描いていた理想の女性とは遠く離れていることには間違いない。今までの人生の中で、最大のナゾである。・・・しかし今のところ自分のカンはまだ正しいらしい。家に帰ると食事の用意がちゃんとされているし、晩酌も毎晩OK。家にいることが結構心地いいのは、幸せなことなのかも。

③かみさんの出産

当然自分の子供である。可愛くないわけがない。目に入れるべきではないが、それでも「この子のためなら」と考えられることに、親としての実感が少しは出てきたのかなと最近思う。生まれるまでに紆余曲折があったから、余計にそう感じるのか。

『とにかく子供が早く欲しい。できれば三人』かみさんと一致した意見である。どうして子供が欲しいかを考えたことはないが、私もかみさんも三人兄弟・姉妹だったから、にぎやかな家庭に憧れていたのだろう。ハネムーンベビーにはならなかったが、おかげさまですぐ妊娠してしまった。ここから長い日々が続く。つわりはそれほどひどくなく済んだが、一般に言う安定期がなかった。五カ月を過ぎたころから、せっかちな親の性格に似たのか早く出てきそうになっていた(らしい)。「無理をする」と早産してしまう」と医者に脅かされ、楽しみにしていたGWの帰省もできず、ひたすら安静にさせていた。六カ月目になり、ようやく安定してきたので、かみさんとの念願の旅行を一泊二日で行ったが、やはりこれが悪かったのか、しばらくして様態が悪化(したらしい)。定期検診に行ったところ、「生まれかかっている。すぐ入院しなさい。」といわれたので、設備が整っていて最初からそこで出産する予定だった、かみさんの実家近くの病院まで車で一時間かけて連れていき、診察が終わるやいなや即入院の絶対安静。食事もトイレも寝たまま。体を起こすとすぐ生まれる状態(だったらしい)。二十四時間の点滴と看護でなんとか十カ月まで持たせ、もう大丈夫なので点滴をはずした数時間後にぼっこり生まれてきた。陣痛が始まってから一時間もしないうちの出産だった。あまりの超安産だったため、かみさんの両親も間に合わず、出産に立ち会うことを考えていなかった私は当然電話で知った。前記の文の中で数回(らしい)を使っているが、当時何を言われてもピンとこなかったものだからそのように書いたが、生まれてきてから改めて、入院時の事態の深刻さに背筋が寒くなった次第である。どちらにしても結果オーライで済んだのはなによりであるが、かみさんの我慢強さや子供に対する思いにはただ尊敬するばかりである。

この産政塾の第一回目の会合では、『二十年後にどうなっているかを考える』を各人思い思いに述べていたが、私は確か「二十年後世の中がどう変わっているかはよくわからない。ただ、早く子供が欲しいので、生まれるであろう子供が元気で、のびのびと育つ環境を作ってやりたい。」と言った記憶がある。この時は一年後本当に親になっているとは思ってもせず、こうなっているといいながらも軽い気持ちだった。でも今は真剣に考えていかなければならないと感じている。最近のニュースや新聞を賑わしている事件・事故の悲惨さは序文で述べた通りであり、これから大きくなっていく子供たちにとって、決してよい環境でなくなってきたのは事実である。

しかし、将来を悲観してばかりいてもしかたがないし、自分ができることもあるだろうから少し前向きな考えをすると、自分がどれだけ『親』としての自覚を持てるかということに尽きる気がする。古くから「子は親の背中をみて育つ」といわれているが、疑うことのできない事実と思う。つまり自分が分別をしっかり見極めて行動しなければならぬということだ。新聞か何かの記事に出ていたが、今の親は子供を叱るのに「くに怒られるからやめなさい。」ということが多いらしい。やった行為を叱らないから、子供には何が悪いかわからない。わからないから同じことを繰り返し、極端だが最後には「怒られなかったら何をしてもいい。ばれなさい。」となるそうだ。また「子供を、いちどもたたいたことがない。」と自慢する親も多いという。子供をまっすぐ大きく育てることは、親の責任である。人生八十年時代。親がかばってやれるのは、初めのわずか二十年間。その後の六十年間は、自分一人で生きていかなければならない。何がよくて何が悪いことなのか、どうしてそれをやったらダメなのかを最低限知っていないと、子供は自分で判断できなくなる。また、自分が痛みを知らないとい

人の痛みなんか分かるわけがない。偉そうなことを言うつもりは全く無いが、そのように育てられた子供が可哀相な気がしてならない。

私は、自分の子供に期待することは特にない。ただ元気にまっすぐ育ってくればそれでいいと思っている。幸い、子供の顔をみると、悲観ではなく希望がわいてくる。かみさんと協力しながら、子供と格闘する日々がこれから始まる。どうなっていくのか非常に楽しみである。

ふりかえってこの一年間は、自分の一生にとって忘れられない思い出になる。そんな時期に産政塾に参加し、たくさんの方と交流することができたのは、大変ラッキーなことと思う。この経験を生かすも殺すも自分次第だが、決してムダにはしたくない。今後もこの交流を続けていきたいと思う。

最後に、佐宗氏を初めとする中部産政研の方々、塾生の皆さんには心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

私の「アルト・ハイデルベルグ」



日本電装㈱ 人事部

向井 克之

〔プロフィール〕

むかい かつゆき (31歳)

- 1964年 三重県伊勢市生まれ
- 1988年 日本電装㈱入社
人事部人事にて個別人事を担当
現在に至る

〈家族〉 独身

〈趣味〉 スキー

〈モットー〉 自然が一番

私は三重県の伊勢で生まれた。気候温暖にして地味豊か、暮らして行くのに憂いのない土地である。そんな土地で育った私は、いつの頃からか「北」に対する漠然とした憧れを持つようになっていた。理由は今にしてもわからない。ただ北国にはロマンがあると信じていた。そして私はその夢をかなえることができたのである。

*

*

*

「山紫に水清き、郷は名に負う五城楼」と謳われた地、「杜の都」「東洋のハイデルベルグ」（私はこのハイデルベルグという響きがいたく気に入った一なんとロマンの香り漂うことか）と幾分の誇大広告的修辭で飾られる地、仙台に、私は人生の中で一番良い時期を過ごす機会を与えられたのである。

私が住んでいたのは仙台藩の始祖伊達政宗の廟がある瑞鳳殿にほど近い霊屋下（最初に聞いた時はいささか不気味であったが政宗公の墓所が近くにあると知って納得）という所で、湾曲した広瀬川に囲まれるようにして私のアパートは建っていた。車通りからはかなり奥まった所にあつたため、夜ともなると静寂そのものであつた。初めて迎えたアパートでの夜、布団の中に横たわっていると、耳もとでサラサラという音が聞こえてきた。広瀬川の流れの音である。この贅沢なBGMを聴きながら、私は眠りについた。

*

*

*

仙台では、私は自転車で行動していた。学校のある川内へ、中央通りや一番町へ、夜の街の国分町

や稲荷小路へ、友人が多く住んでいた八幡へ。アップダウンがあると少ししんどかったが、それさえ除けば、実に快適な交通手段であった。季節によって微妙に異なる街の空氣に触れることができ、また街の中に溶け込める気がした。そして、都市の大きさも自転車を持ちながら、それでいてまとまりがある都市。人によっては中途半端な大きさだと言うだろうが、私は氣に入っていた。大きければ良いというものではない。

* * *

春はゆっくりとゆっくりと来る。仙台に来て初めての春、私は少し戸惑っていた。いつまでたっても春の王たる桜が咲かないのである。特に桜好きという訳でもない私だが、それまでの私の人生では決まって入学式の頃に咲いていたものが、咲かないとなると妙に氣になる。できたばかりの地元の友人に、いつ頃咲くのかと聞いてみたら、彼は何気なく答えた。「四月の終わり頃、黄金週間の前ぐらいかな」と。そんなに先か、と私は思い、それきり桜のことも、なかなか来ない春のことも（實際寒いのである。花冷えどころではない）忘れてしまっていた。

それからしばらくしたある夜のこと。私は飲み会の後、アパートへの帰り道をたどっていた。アパートの近くの曲がり角まで来たとき、ふと顔を上げると、春がそこにあった。一本の桜が、まだ三分咲きぐらいなのだが、旧式の街灯の薄黄色の先に照らされて立っていた。

幽玄。

ふわっとした、そして香しい大氣。私はどれぐらいその桜に見とれていただろうか。まさに、春宵

一刻価千金。目を離すとその桜が消えて無くなってしまおうとも思っているように、ただひたすら見つめていた。

*

*

*

私の自転車は、川内の丘を駆け降り、大橋を渡り、西公園を左に見ながら青葉通りへと駆け登る。久し振りに晴れた初夏のある日、仙台が一年の中で最も輝くときである。

街中の木々がその枝に若葉をそなえ、陽の光がその若葉に照り返り、あたりが全て緑一色になる。仙台の街全体がそんな風景になるのだが、私が一番美しいと思うのは、青葉通りを西公園側から東の方へ（つまり駅の方へ）向かう時である。道路の真中にその堂々とした幹を直立させているケヤキ。その梢についている幾千万の透き通るような若葉が風にさやめいている。そんなエメラルドグリーンのトンネルを通り抜けるとき、「杜の都」を実感することができる。

仙台を離れてからも何度か彼地を訪れる機会があったが、青葉通りのケヤキが少し小さくなったような気がした。聞けば、あまりにも大きくなり、枝葉で道路標識が見にくくなったので、枝を一部切り落としてしまったとのこと。なんたる無粋。いかにも役人の考えそうなことと、私は一人で憤っている。

*

*

*

短い夏が終わると秋はすぐにやって来る。青葉通りや定禅寺通りのケヤキが色づきはじめると、そ

れは芋煮会の季節が来たことを意味する。

芋煮会という言葉は仙台へ来て初めて耳にした言葉であるが、要するに、河原などで主に豚汁を囲みながら酒を酌み交わすというお手軽なピクニックである。休日ともなると、芋煮会のメッカとも言える牛越橋のたもと近辺は、様々なグループが思い思いの食べ物を囲んでどんちゃん騒ぎをやっている。澄み渡った空の下で、美しい広瀬川の流れを見ながら、気の合った仲間と豚汁を啜り、酒（浦霞・一の蔵が一般的とされていた）を飲む。遠くまで遊びに行く必要など全くない。

*

*

*

あれは多分、仲秋の名月といわれる夜だったと思う。私は例の如く、自転車に乗って夜更けの道をアパートに向かっていった。そして、アパートの近くの評定河原橋にさしかかったとき、私は思わず息を飲んでいった。

川面全体が銀色に光っていた。頭を上げてみると、それまで街灯で明るい所ばかり走っていたので気がつかなかったのだが、真蒼な月が青葉山にその影を落としていた。

玲瓏とした空気が、静けさの中でさえわたる川の流れの音、そして金属的な感じさえする冷たい蒼さで輝く月。私は肌寒さをも忘れてそこに佇んでいた。何度も溜め息をつきながら。月の光など何処で見ても同じだとは思ふ。仙台で見ようと、東京で見ようと、名古屋で見ようと。しかし、あの夜見た月以上のものは未だに見ることができないでいる。

*

*

*

雪にも匂いがあると思う。私が生まれた伊勢でも年に何回かは雪がちらつくが、基本的には縁のない暮らしをしていた。

仙台も日本海側ほどではないにしても、降る時は降る。ある朝、私は目覚めた時、何か違和感を持った。よく考えてみると、外の音が全く聞こえてこないのである。カーテンを開けてみると、一面の銀世界であった。外へ出てみる。二十センチぐらいは積もっているだろうか。初めての経験だった。私は少しはしゃいでしまい、あちこち歩き回った。そして一息入れようと立ち止まり、深呼吸をした。その時、私は雪にも匂いがあると思った。少し埃っぽいような、鉄のような匂いだった（ような気がする）。

*

*

*

来る前から大きな憧れを持っていた仙台。住んでみて、四季折々に見せる街の表情に触れるにつれて、ますます好きになった街仙台。

「アルト・ハイデルベルグ」という私のお気に入りの物語がある。その中で、プリンツ・ハインリヒやケーティが青春を謳歌したハイデルベルグがどんな所か、私は行ったこともないが、きっと仙台と良く似た街なのだろうと思う。誰が何と言おうと私はそう思っている。

これから何年も経って、自分が老年となっても、私は仙台を訪れることだろう。街並みや風景がどれだけ変わってしまったとしても。仙台は私の（あまりにも陳腐な表現だが）心の故郷であるから。

『Calm down』



トヨタ自動車㈱ 人事部

説 田 公 人

〔プロフィール〕

- せった まさと (35歳)
- 1960年 岐阜県大垣市生まれ
 - 1983年 トヨタ自動車㈱入社
経理部配属
 - 1993年 人事部に異動し、福利厚生、労務を担当
- 〈家族〉 妻・子供2人 (一男一女)
- 〈趣味〉 本文中記載
- 〈好きな映画〉 『汚れた顔の天使達』
『ニューシネマパラダイス』

三十五才にもなると、だんだんと自分が見えてくる。長所・短所、得手・不得手、性格の良し・悪し、それぞれ前者のリストが圧倒的に多い、と言いたいところだが、実際にはその逆のようだ。

今回は、特に今、自分への戒めとして心掛けていることを事の大小を問わず、以下に記してみたい。正直言つて現在の情けない自分をさらけだすようで大いにためらうところではあるのだが。

『カームダウン』

今年に入つて二度動転した。

一度は、自宅で朝までかかつて作成した資料（幹部社員向けの役員講話骨子）を保存間際に消してしまった時。あまりに動転して、通勤の際、文章を思い出しながら、また、対処法に思いを巡らしながら運転していたため、高速道路の出口料金所を走り過ぎてしまった。その後、係員に笛を吹かれながら追いかけれ、気がついた後は今度は通行券が見つからない。結果は、精算・資料とも大過なくすんだものの、本当に慌てふためいた。

二度目は、先日、ゴルフに行く際のこと。目覚し時計が故障して、出発予定時間を大幅にオーバー。何故、よりによって時計が止まるのかと悔やみつ、どの径路が早く着くだろうか、どの時点でゴルフ場・他メンバーに連絡すべきかなどと思案しながら、慌てて出発したところ、なんとゴルフバックを忘れて出掛けてしまった。径路も工夫し、可能な限り飛ばして、ようやくスタート時刻に間に合うと目途がつき、ホッとした時、忘れ物に気がついた。

起こってしまったことを悔やんでも何も解決しない。あせつてことを為してもロクなことがない。

こんなことでは、災害が発生した時に家族を守り、支えになるということすら覚束ないはずだ。男たるもの、ピンチの時こそ、『慌てず、焦らず、どっしり構えて』対処しなければならない。

『こだわらず、決めつけず、素直な目で』

価格破壊が進み、店頭には信じ難いような安価の商品が並ぶようになってきた。全く喜ばしい限りだが、その安価の商品が素直に買えない。買う決断をするまでに、かなりの時間を要してしまう。商品の定価が示され、それが割り引きされている場合や有名ブランドの戦略商品であるとか、ヒット商品といった理由があれば別だが、何もない場合は躊躇してしまう。機能、材質も明示されており、あとは自分の外観に対する趣味と価格とのバランスで買うか否か決めるだけであるのだが、値段の発するメッセージに惑わされてしまう。これは、徹底的な本物指向であるとか、『安物買いの銭失い』の経験則からのものではなく、単に物の価値を値段でしか判断できないことによるためである。ひどい時には贈り物を受けたときの有難みや自分の持ち物への接し方までも値段に影響されてしまっていることに気がつき、愕然とする。実に情けないことだ。

人についても仕事についても何事においても同様だ。潜在的なところで、それぞれ肩書や外見、依頼者や決裁レベル等のレッテルで価値や重要性を判断してしまっていることがある。

物事の価値・本質を見極めることは大変難しく、そんな人生の命題のようなことを目指したいとはいわない。ただ、常日頃から、万事、こだわらず、決めつけず、素直な目で、また自分の尺度で物事を見つめることを心掛け、少しずつでも『自分の価値観を養っていきたい』と思う。

『一張一弛』

最近、つくづく集中力が失せていることを実感する。この文章もここまで記すのに何度ワープロの前を離れたことだろう。結局、仕事の成否、できるか否かは、頭の善し悪しより、間違いなく集中の度合いにかかっていると思う。そして、その集中力は無為無駄な時間とバランスをとることで高めていけるものだと考える。

ユダヤ教には、『シャバット』という戒律があり、これは、金曜日には何もしてはいけない、何もせずに精神をリフレッシュさせて、その反動でダイナミックに動き出す、というものだそうだ。ポーとする一日があるから、猛烈にやる気が湧き、集中力が発揮される。ユダヤ系人種は大変優秀でビジネスでの成功者やノーベル賞受賞者が数多いといわれるが、それもこういったところに理由があるのかもしれない。

ある芸術家が「自分は何をする場合でも好きなことしかやらないから、自分をオンとオフに分ける必要がない。」と言っていたが、会社勤めをする者にとっては、そんなわけにいかない。

オンとオフのメリハリをしつかりつける、即ち、オフの時間を楽しく際立たせることで、オンの時間の集中度を増し、中身を濃くしていく。このように自分を仕向けていくことが必要なはず。

休日にはヒゲを剃らず、髪を整えず、腕時計を変える、こうした気分的なことをメリハリをつけるための一つの要素として続けている。自分にとって少しでもリフレッシュできることであれば、今後もどんな些細なことでも取り入れていきたいと思う。

そして、仕事の面だけでなく、日常の生活自体も緊張と弛緩、地味と派手、節約と贅沢といったメリハリをつけたものにしていきたい。

『オンリーワン』

転居前の隣人達の誘いをきっかけに、今年から本格的にオートキャンプを始めた。日本人らしく、ブームに乗ってしまったわけだが、すっかり虜になった。家族を置いて一人で興じるゴルフ等と違って、これは一緒に楽しめるのが良い。虫や魚や草花、風や日差しや星など自然を満喫でき、人間の本能的な部分を満たしてくれるのが良い。そして、とりわけ、食事や暖をとるための焚き火が楽しい。火を絶やさぬよう、ただ火を見つめているだけで、その間はまさに無心の境地となり、何とも言えぬ幸福な気分を味わえる。

このところ、他人には負けたくないというものが、というより、そもそも自分自身が無我夢中になれるものが減ってきたことが気になっていた。

中学・高校時代の一時期は朝から晩までまさにバスケットボール一色。左手でのドリブルやシュートが下手で悩み、時間があれば練習し、更には左手で箸を持ち、ボタンを掛け、字を書いた。また、枕もとでフォーマーションを考えるのが日課で、それは何冊ものノートになった。大学時代は映画漬けの日々。映研に属し、暦の日数をはるかに上回る本数のフィルムを観、自分なりの解釈や視点で批評をし、それを競うようにして『キネマ旬報』に投稿した。好きな映画作家の脚本を暗記するように覚え、原作がある場合は対比して精読した。2本だけだが、脚本も書いた。会社に入り、テナーサッ

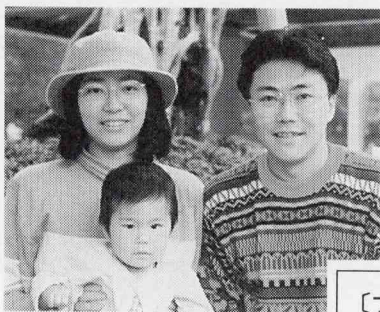
クスを買い、社内クラブに入るも、仕事に追われ、まともな演奏ができないまま中途半端に断念。その後、ゴルフを始めるが、未だ夢中という域には至っていない。

そして、今年、前述の通り、『オートキャンプ』なかでも『焚き火』の楽しさを知った。

久々に夢中になれるものが現れたという予感がする。焚き火は薪、枯れ枝、枯れ葉、不要の紙屑の類を集めて燃やすという、単純明快、簡素なもの。但し、数を重ねると薪の組み方や着火材に頼らなくともよくなるなどの技量が高まってくる。また熟練を重ねると、黒い炭でなく、真白い灰になるまで完全燃焼させることができるという。ゆくゆくは、燃えしろの特徴や火の性質を熟知し、技量を深め、煙りにむせることなく、着火からピーク、そして鎮火に至るプロセスを自分の意のままコントロールする、そんなところまで極めてみたいと想いがめぐる。焚き火を十分に堪能したら、今度はまた次の打ち込める好きなものを見つける。こんな風に無我夢中になれることを少しずつ増やしていければと思う。

会社での働き方も世の中で値のつくような専門性が求められてきている。趣味だけでなく、仕事においても、どんな狭い領域でも良いから、何か人より勝るもの、オンリーワンといえるものを身につけ、それを抛り所にして自分を成長させていきたいものだ。

『本質を見つめる眼』



松坂屋労働組合

中 村 文 彦

〔プロフィール〕

なかむら ふみひこ (28歳)

- 1967年 愛知県名古屋市生まれ
- 1986年 株式会社松坂屋入社
名古屋店室内装飾品売場配属、
その後、営繕課に異動
- 1992年 松坂屋労働組合名古屋支部
書記次長 (専従)
- 1994年 松坂屋労働組合中央執行委員
(専従)

現在に至る

〈家族〉 妻・長男

〈趣味〉 車、ゴルフ、スキー

〈好きな言葉〉 賢者は愚者からも学び

愚者は賢者から学ばず

今までより感じよう・・・

今回、第六期産政塾の卒業論文として与えられた題目が、『感じたこと・考えたことを自分の言葉で』であった。この宿題を手にして最初に感じたことは、「今の自分は、日々あまり感じていない、あまり考えたこともない、自分の意見をはっきり持っていない。」であった。

それから二か月弱「今までより感じよう、考えよう、自分の意見を持とう」と心に念じ過ごしてきた。その甲斐あってか、おぼろげながらイメージが浮かんできた。それを書いてみたい。

今まで一番燃えたこと

今日まで過ごした二十八年の人生の中で、一番燃えていたのはいつだろう。

間違いなく今から十年前、高校三年からの二年間だ。飛ばすゴルフに異常に熱中していた。

自宅から学校まで片道約十キロを自転車で通い、一日おきにジムで筋力トレーニング。食事にも気を配り、一週間に千五百球の打ち込み、心理学やメンタルトレーニングの本を読みあさった。当然プロの先生にも付いた。当時は本気でプロを夢見て、心・技・体すべてをトレーニングした（今思えば「何がプロだ」と我ながら恥ずかしく思うが・・・）。

そして、飛ばすことについては十分満足のいくレベルになり、ゴルフがさらに楽しくなった。しかし、いいことばかりではなかった。ボールを飛ばすのに、最も重要な腰を痛めてしまい、残念ながらプロ夢を断念せざるを得なかった。

しかし、その時お世話になった水野紀文プロ（桑名C・C）からは、多くのことを学んだ。ものの考え方について、最も印象に残っているエピソードを一つ紹介したい。

よく聞くゴルフのアドバイスに、「もっと軽く振れよ」というのがある。これは、水野プロに言わせると「それは、おかしい」となる。もちろん、軽く振る打ち方もあるが、全身全力でクラブを振ったこともない人にそんなアドバイスすることは、おかしいし、可愛そうだと言うのだ。

レッスン時、「中村君、本当に思いつき打ってごらん」と言われた。今まで、軽く打てと言われることはあるが、思い切り打てと言われたことはないのです、ここぞとばかり思いつき打った。結果は、会心の当り。「どうだ」と言う顔をして、ニヤリと笑うプロを見た。褒められるのかなと思ったら「もう一度打ってごらん」とプロ。それが五回続いた。五回とも満足の行く結果で、こんどこそ褒めてもらえると思ひプロを見た。

開口一番「本当に全力で打っていない。」とあっさり言われた。本当に全力で打っていたら、五回も連続で打てない。一球打つだけでへばってしまふ程、力を出し切ることを思いつき振ると言い、それ以外は、遊びと同じ。人から狂人と思われる世界に挑戦し、その世界に達して、初めてわかることだから、軽く振ればいいなんて、安易にいうもんじゃない。と教えられ、返す言葉がなかった。軽く振ることとは、全力で打つ世界を知っている人にしかできないことである。

このエピソードから次のことを学び、今でも肝に銘じ生活している。

—— 最もらしい意見を本質も知らずに最もらしく聞き、そのまま鵜呑みするのではなく、

本質を見極め、その意味するところを知ることが重要である。 ——

今の本業「労働組合」

縁あって、労働組合の専従になり、三年が経過した。今までの私の人生の中で、一番短く感じた三年間であった。三年間を振り返ってみて、最初の2年間は、支部の書記次長として現場の組合員と接し、身近な課題解決に取り組み、組織運営の大切さと難しさを学んだ。

そして、この一年は、組合の所有する保養所の運営全般、財務、広報など次々と今までにない経験をさせていただいた。

そんな三年間の経験を通じて痛感したことがある。今まで、バランス感覚に欠けるものの見方、考え方をしていたということである。ものごとには、両面もしくはそれ以上の見方があるということには百も承知だが、実際に人の意見・考え方を聞いてみると、それに気付かない。

営繕課で電気設備の仕事をやっていた頃は、設備保守及び照明・防災・防犯設計をこなし、ある程度自分の役割が明確になり、自分のものの考え方に自信を持っていた。労働組合に移り、全社的な立場で広い視野に立ち、バランス感覚を持たなければならぬ仕事に変わってからというもの、ものごとを考える基準が、「安全第一」から相手の立場や環境など多方面にわたるようになった。労働組合の日々の仕事は、自分の人生において、大変勉強になっており、今のこの時期に経験できることに感謝している。

残りの人生、十六億秒

突然だが、今一番気に入ってる歌がある。「たまにはこうして肩を並べて飲んで・・・」の歌い出しで始まる「JUNGLE WITH THE WOW WAR TONIGHT」だ。歌詞を噛み締めて聞いたこともない私が、珍しく「うん、わかるその気持ち。」と思わず全フレーズ聞き入ってしまった。

その一節に、「温泉でも行こうなんていつも話している。落ち着いたら仲間で行こうなんて。でも、全然暇にならずに時代が追い掛けてくる。走ることから逃げたくなっている・・・」とある。時間にゆとりのない人の気持ちを歌っているように聞こえ、まるで、今の自分の気持ちを代弁しているかのようなところに共感した。

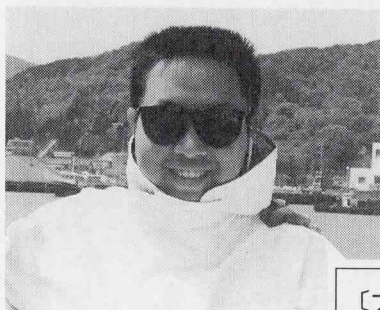
人生八十年として、その三分の一が過ぎた。残り時間を年数ではなく、秒数でカウントすると約十六億四千万秒となった。こうしている間にも、どんどんカウントダウンしていく。「工夫ひとつで、時間は作ることができる」と言われているが、私はまだその技術が未熟だ。

ムダに過ごせないが、慌てて過ごしたくない。まだ、こんなに時間があるじゃないか、余裕だねと言えるようになり、自分なりの豊かさを実感したい。

最後に、組合を離れて様々なものに触れ、ものごとを考える機会を与えていただいたことに感謝します。また、同期生のみなさん、事務局のみなさん一年間ありがとうございました。



ヨットはなぜ風に向かって走れるか？



トヨタ自動車労働組合

高橋 誠

〔プロフィール〕

たかはし まこと（34歳）

- 1961年 東京生まれ（⇒どことなく都会的な感じがする）
- 1987年 トヨタ自動車㈱入社
- 1994年 トヨタ自動車労働組合に出向
現在に至る

〈趣味〉 ヨットの上でビールを飲んでヨットする（酔っとる）こと

〈得意技〉 書道（達人の域に達した）

〈夢〉 フェラーリ328GTSを所有すること

〈家族〉 妻1人（ひとみ）、子供1匹（7か月の長男一平ちゃん）

今日は十一月の四日で、このレポートのメ切はとづくに過ぎているのですが、サソウさんに許してもらって、何とか十一月七日までに仕上げようと頑張っていますが、頭の中には何の構想もなく、思いついたまま「つれづれに」ワープロを叩くことになりそうなので、最初に宣言しておきます。

産政塾に参加してもそうですが、「趣味は？」と聞かれて「ヨット」と答えると、「何人乗り？」「中で泊まれる？」の次に多い質問は、「どうして風に向かって走れるのか？」というものです。ヨットを始めてもう五年も経ってしまったので、この疑問に答えるべく何か書いてみたいと思います。

労働組合に籍を置いてヨットが趣味となると、なんだかフォーカスやフライデーのような写真雑誌に大スクープとして掲載されそうですが、私の場合は五年前、会社の友人三人と話していてヒョんなことから、「ヨットをやろう！」ということになって始めたもので、決してオン・アノンさんのような美人、ましてや水着の美女が同乗するわけでもないし（時々若い女の子を誘うことはありますが、何故か皆なしっかり着込んでいます）、ハーバーにはカローラワゴンで乗りつけるわけですから、そんなネタにはなろうはずがありません。

また、ヨットというと松阪屋労組のナカムラさんやトヨタ労連のイシカワさんのような人は、すぐに「海の上に出たらこっちのもんだよな。」とか「波間にゆれながら・・・か。」などヘンな想像をして、ウエオカ先生から叱られそうですが、ヨットは最低三人のクルーが必要で、決してそんなことにはなりません。私は、始めからそんなことは全く考えもしませんでした。二人きりになれないことを知った時はショックでした。

ここで、私たちのヨットの紹介をしたいと思います。

船名…マリンティニ・タヴァン (YAMAHA 26II-S)

全長…7・99 m

定員…8名

全幅…2・80 m

セイルエリア…

排水量…1・95 t

メイン 18・25 m²

補機…1 GM (9馬力のエンジン)

ジブ 14・00 m²

船名のマリンティニ・タヴァンとは、

マリンティニ＝マリーン（カジキ）＋マティニ（カクテルの一種で妻楊枝にオリーブが刺さったものが入っている）の造語で、船体には尖った鼻先にオリーブを刺したカジキをイメージしたイラストを貼りつけています。とタヴァン＝英語で居酒屋の意味。を合わせたもので、何やら訳がわかりませんが、とにかくビールを飲むには最高の場所だということです。

ビールを飲んで安らかな気持ちになれば、マツダイラ先生のように立派になれると思いましたが、今のところ立派になったのはお腹だけです。

大きなとしては小型の部類に入りますが、ヤマハ主催のレースではそこその成績を取れる実力がありますし、一泊するつもりであれば鳥羽までは十分に行くことができます。産政塾の最後の会合の翌日は、ヤマハのレースで鳥羽に行きましたが、サソウさん、イシカワさん、ナカムラさん、ハヤシ

さんの応援も虚しく最低の成績でした。

普段の楽しみ方は、ヤマハのレースが年に五戦程、ハーバーのレースが三月から十一月の最終日曜日に行われるので、それに参加する体育会的な活動（レース後のビールは格別です）がメインで、夏になると三河湾の島でB—B—Qといったものです。夏は風がないので今一ですが、九月に入るといい風が吹いてきて、滑るように走っていきます。

ヨットのいいところは、この滑るように走っていくとこだと思っています。ハーバーから出ていく時にはエンジンを使いますし、海の上で突然風がなくなってしまうこともあるわけで、エンジンは必需品ではありますが、いざセイルを上げて走り始めると、それはもう音もなく滑るように走っていきます。スピードは、せいぜい時速十km/Hと、普段クルマに乗り慣れた身にはひどく遅いものに感じられますが、この音もなく・・・がモーターボートと違う風がなければ走ることのできない、この不便な乗物にこころ引きつけられる醍醐味なんだと思っています。

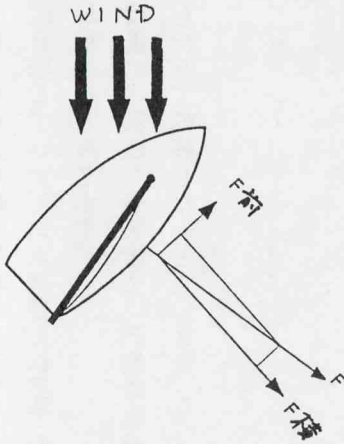
さて、本題の「ヨットはなぜ風に向かって走れるか？」ですが、確かに帆を上げた船が風上に向かって走れることは、常識外のことのように思えます。でも、ヨットが風上に向かって走れるということは、自然の力を使ってどこへでも行けるということを意味しているわけで、そのことが万人を魅了する秘密でもあると思います。

風上に向かう時のヨットのセイルは、鳥の羽根と同じような形になります。鳥の羽根と同じということはどういうことかというと、鳥や飛行機と同じように羽根の膨らんだ方向へ進むということです。鳥や飛行機が飛び上がるようにヨットもその方向へ進むということです。

ただし、船には進行方向がありますから、実際には船体を横に傾けながら進行方向へ進むといった具合になります。この横に傾くことをヒールといい、風の強さによりこの傾きの大小はあるものの、風上に向かって走るヨットは必ずヒールするものなんです。

風下に向かって進む場合は、セイルに風をはらんで走るわけですからヒールしませんのでテレビでヨットレースを観た時にヒールしていれば、風上に向かって走っていると考えて結構です。考現学のオカモト先生も、さすがにこのことは本に書かれていませんでしたので、教えて上げたいとは思いましたが、百倍くらいのが返ってきそうでヤメにします。

〔図解：ヨットはなぜ風に向かって走れるか？〕



- ① 風がセイルに当たってFが発生
- ② FをF前とF横に分解すると、
- ③ F前の力で前進、F横の力でヒールする

一応、紙面上は四千字相当をクリアしたので、ようやく「でっち上げ」は終わるわけですが、本文中に登場していただいた皆さんは架空の人物であり、産政塾に関わりのある方はひとりもないことをお断りしておきます。

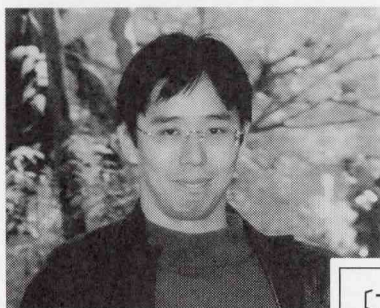
最後に、私の「卒業論文」が無事審査を通過することと、私以外の誰かの「卒業論文」が落ちることを祈り、乾杯したいと思います。

カ・ン・パ・イ／＼／

追伸：OB会いつかやりますので、参加下さい。



節 目



アイシン精機㈱ 人材開発部

本田 武志

〔プロフィール〕

- ほんだ たけし (27歳)
- 1968年 愛知県名古屋市生まれ
(岐阜県育ち)
 - 1991年 アイシン精機㈱入社
現在人材開発部にて賃金管理を担当
- 〈家族〉 妻 (佳代子)
- 〈趣味〉 剣道・スポーツ観戦
- 〈好きな言葉〉 前進

はじめに

一九九五年は日本にとって戦後五十年の節目といわれています。ここで戦後五十年を振り返ってという大きなことを語るつもりはありません。ただ、私の人生において、一九九五年は大きな節目でありました。（まだ終わっていませんが）

会社の中では、主任への昇格、私生活では結婚、産政塾への参加はもちろんのこと、英会話の勉強開始など大きなことがありました。こうした出来事は、自分だけでなし遂げたものは一つもありません。周りの皆さんが支えになってくれたり、励ましてくれたり、相談にのってくれたりしたからこそ出来たことだと思っています。

感謝と決意

まず、昇格については、入社以来、職場の皆さんに支えられてきたからこそ出来たことだと思っています。自分の力は今でも未熟ですが、入社時点は、『単なる声のかい、喧しい新入社員が入って来ただ』という感じで、分からないことがあればすぐにどんどん構わず先輩方に聞いて回っていました。例えば、定時後に、「○○さん、ちょといいですか」からはじまって先輩の席に近づくと、業務のことから始まって、職場のことや自分のことなどいろんなことを相談にのっていただき、いつの間にか帰社時間が、十時・十一時を回ることであり、いま考えてみるといやな顔せずに私のわがままに親身になって付き合っていただき、応えてくれる先輩・上司は大変だったろうな—と思います。こうしたこ

とが私をどれほど成長させたことでしょう。さらに、心にどれほどやすらぎをあたえてくれたことでしょう。そして私を『もっと頑張ろう』という気にさせてくれました。

このような、わがままな行動を許してくれた職場の皆さんに大変感謝しています。そしてまだ見ぬ後輩には、先輩達と同じように私も接しようと思います。

さらに私は、昇格にあたり、『現状に満足しがちな自分を常に新しいものに挑戦していく自分に変えていきたい。時代の変化（パラダイムの変化）に対応していける自分になりたい』ということを決意表明しました。

これは、自分自身の意識のなかに、今の現状に甘んじて、敷かれたレールを歩いていく傾向や自分の殻に閉じこもって「今までのやり方」「決まっていること」に何の疑問を持たず、慣例にながされる気持ちがあり、自分の成長を邪魔するものとして、この意識から脱却したいという思いがありました。そして、自分自身の弱さに打ち勝ちたいと強く思うことによってこの昇格を大きな節目としてとらえたいと思います。

結 婚

次に、私生活の面では、結婚という大きな節目（出発点と言ったほうがいいかもしれませんが）を迎えましたが、今までの生活と様式ががらりと変わりました。

一人暮らしは大学時代から七年が経っていましたので、会社から帰ってくるといつも、寮でひとり、ごはんを食べ（コンビニの弁当が多かった）、風呂に入り、寝るという生活になっていました。三月に

結婚してからは、当たり前ですが、全てが二人での生活になりました。コンビニの冷たい弁当でなく、温かい食事や食後の会話など、七年間忘れていたものが蘇りとても新鮮でした。そして安心感とともに、充実感を味わう毎日を送っています。また、二人の生活は、病氣という面ですごく心強く思います。それは、私が十月に少し風邪をひいた時に、独身時代は、寮で一人で寝て、じっと治るのを待つだけでしたが、これからは心配してくれ、元気づけてくれる妻がいると思うと一人の時よりも安心でき（逆に妻には大変心配をかけることになりますが）大変感謝しています。まず、こんな些細な例ですが、結婚してすぐ充実しています。

ただ、毎日こうした生活を送ることが出来るのも、日本が平和であるからこそだと思います。戦争を体験していない私達の世代にとっては、映像という世界だけでしか戦争の悲惨さを感じることに（心に刻むこと）ができませんが、平和な世界を永遠につづけていくようにすることが私たち世代にかけられた使命であると思います。

これから生まれてくる我が子のためにも（まだまだ先になりそうですが・・・）

国際化

三つ目の一九九五年の節目は、我が部署にもいよいよ国際化がせまってきたということです。職場にはどんどん外国人が行き来しています。又、日常会話に英語が飛び交うことはないにしても少しずつ英語が話されるようになりました。さらに人事担当者が始めて本格的に海外に赴任するという状況になり、ますますこれから人事の国際化が進むという雰囲気になっております。

こうした雰囲気からか、全社的にTOEICを受けて英語力を試そうということになり、その次にレベルに応じた英会話のレッスンが始まりました。

TOEICを受ける少し前に実家に戻ってみると父がNHKの「英会話」を聞いているではありませんか！ 六十歳を過ぎてても語学への執着心を持ちつづけるということに関心してしまいました。元来、父は英語が好きでしたが、将来、母と外国旅行へいってみたいという夢を持っているようです。それにしても凄いパワーを持っていると思いました。それに刺激されてか、実家を帰る日に、その英会話のテープを借りて一念発起『頑張るぞ』と思い聞きはじめました。

さらに大学時代の恩師である中川先生（ゼミの教授）の「二十代が英会話（外国語）をマスターできる最後のチャンスだ（大学時代にマスターすることが一番だが）」という言葉を急に思い出し、これがラストチャンスだという気になりました。

誰でも英語が出来ればいいなという気持ちが強くあると思います。この気持ちが強いが強くないか、そして楽しいか楽しくないかがカギと言えるでしょう。「話したい」という気持ちを忘れずに折角のチャンスなので頑張っていきたいです。部署の国際化の節目とともに自分の国際化の節目としたいと思います。

これから

四つ目は、ずっと先のことになってしまいましたが、私の六十歳以降についてです。なぜこんなことがでてくるかというと仕事がら六十歳定年を迎える人達と接する機会（厚生年金・雇用保険・在職老

齢年金・退職金・税金といったことを簡単に説明する機会）があるのですが、その時に皆さんそれぞれがこれまでの人生の中の会社生活においてあと一年という気持ちで「俺はやり遂げたんだ」という満足感というか自信というものが感じられます。そして、とても清々しく、輝いている人ばかりです。こうした人に接していると、自分がタイムスリップして二十七歳から一氣に六十歳になったみたいに感じてしまいます。ふと考えてみると、自分の「これからの目標」とか「こうになりたい」とか「こういう人間になりたい」といったものを持っているだろうか自問してみました。そうしたときに、自分が一日一日を漠然と過ごしていること痛感します。

よく妻に「どこにも連れて行ってくれない」とか「どこかにいこうよ」と言われることがあります。が、こうした小さいことの積み重ねが「今の生活を単に過ごしていること」につながっているんだと思います。（ほんとに些細なことですが）

こうした自問に対する明確な答えは正直いって分かりませんが、これからの生活の中でどう生きていくのかを常に意識しながら夫婦で見つけていきたいと思っています。

六十歳になっても「輝いている自分」（どうかやいているのか分らないが）でありたいと思います。ただ産政塾の中で「自分の結婚する人は、自分の母に似ている」「自分の子供は自分の姿を無意識のうちに追いかけている」というお話があり、やはり理想の人として自分の父や母の姿を無意識のうちに追いかけているのかと思いました。

最後に

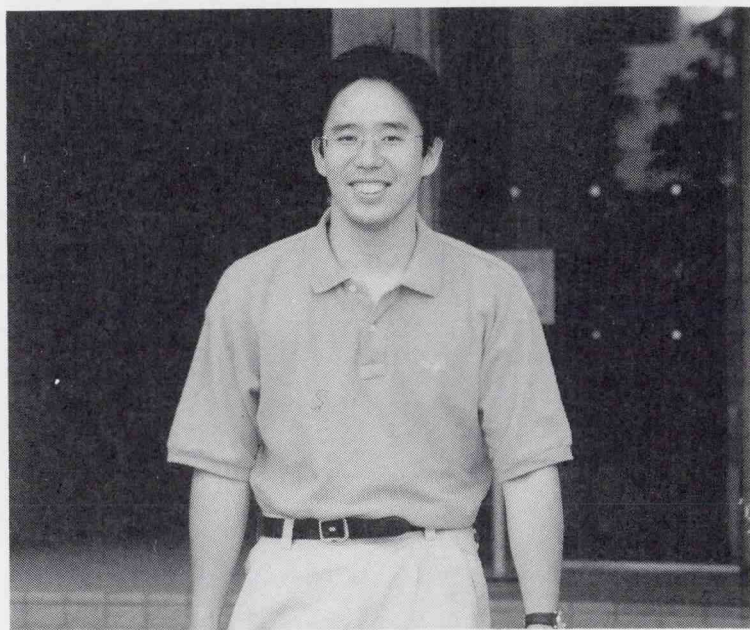
最後に産政塾に参加できたことが大きな節目になっています。入社以来、人事というセクシヨンの中でしか人との関係を持てなかった状態から、社外の同年代の人（実際には自分が一番年下ですが）と語り合い、それぞれの方の「思い」に接していくと、自分という人間の小ささを感じるとともに、大変勉強になることが多く、世界が少し広がったと思います。産政塾の仲間と出会い、こういう体験を可能にして頂いた上司に感謝するとともに、これで産政塾が終わったということではなく、これをきっかけにして、自分の世界を拡げていこうと思います

この一年の自分の節目を書いてみました。木や骨でも何でも節が大きいほど強くなると言われていますが、節の多い人生を送って行きたいと思っています（それが自分の成長につながるかと信じて）

そのなかでも、この一九九五年が節目の年のなかでも一番大きな節目になって忘れられない年となりそうです。

「帰りが遅い」と待っている妻をよそに十時をすぎて会社でワープロをうちながら秋の夜長を満喫している？ 自分を責めながら

一九九五年十月二十七日



Dream a little dream



豊田合成㈱ 人事部

伊 藤 裕 章

〔プロフィール〕

いとう ひろあき (36歳)

• 1959年 8月18日生まれ

〈職歴〉 入社後から約5年間購買部で外製品の発注・価格決定業務を担当
その後、人事部へ移り、給与・賞与・就業制度の運用などの実務を担当 昨年より、企画室

〈趣味〉 スポーツ観戦

〈嫌いな言葉〉 スリーパット

四十円の菊

先日、花屋を通りかかったところ、小菊が一本四十円でした。色は白と、ピンクと、二種類の黄色がありました。夏休みの頃に百五十円位したような記憶があったので、得をした気分になり、わりとたくさん買いました。花ごころなど、見れども見えず、聞けども聞こえずという私は、適当に抜いてレジに向かいました。

包んでもらう間に、ふと後を見ると、年配の女性がいて、入れ物から花を抜いたり、戻したりしていました。老眼の方が新聞でも読むように手にした花を遠くへやってみたり、両手にそれぞれ持った束を合わせてみたり、離したりしながら。

急に、自分に引き取られていく小菊がすこし可哀相になりました。

それでも、渡された私の花はきれいでした。たぶん一番安いものを買い、特にリクエストしたわけでもないのにたいそう丁寧に包装しリボンまでついていたので、少し心配になりました。相場か価格理論か知らないけれど、一本四十円は安過ぎはしないか。売れ残ってしまう分も考えると、仕入値や儲けはどうなっているのだろう。店の人もニコニコしている場合ではないのではないか、などと。

考えても答えが出そうにないことと、よけなお世話であることに気づいて店を出ました。

衝動買いなので使い道が決まっていません。ただ、花の中には、身の回りに置いておくだけで特別な効用を持つ種類があるという話を、通勤途中の車のラジオで聞いたことを思い出しました。例えば、赤いバラには気持ちを高揚させる働きがあり、当面の関心事となっているこの菊には、黄色いものは

血圧を整える効果があるとのこと。それならば黄色い菊だけを花瓶に入れてデスクに置いて上げたい同僚の顔も浮かびましたが、結局、自分のテレビの横に飾ることとしました。

しばらくして枯れましたが、僅か四十円の菊のおかげで、何か目覚めの良い夢を見た朝のような感覚が残っていました。

後日、書物で次のうたをみて、また少し考えさせられたものです。

花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや

（藤原家隆）

職業病

知人で、会社定年後に町の地域活動を始めた人がいました。彼は弁舌さわやかで、フットワークも良いということ、ほどなく世話人的存在になりました。とたんに、これまでうやむやにされていたこと、例えば、共有ワープロの貸出ルール、一斉大掃除の徹底、はては、子供たちのサッカーチームの練習場確保まで、次々と処理していききました。反対する人や、「そこまでしなくても」派の説得にあたっては、「会議の進め方」で身に着けた技術で会合を乗り切り、「データでものを言う」とばかりに色々な事前準備等して。そして、勿論、実行にうつす時は「役割分担」をハッキリさせ、「納期」厳守で、「フォロー」と言う名の督促も忘れずに、という具合に。そして、奥さんまでが近所の人から、お褒めの言葉を頂くほどになったそうです。

が、まもなく奥さんの耳に入る彼の「評価」は、「やり手」から「そこまでしなくても」に変わり最後は、「OUTI DEMO AA NANO?」に変わったそうです。

笑い話をしているつもりではありません。ことほど左様に私たち会社員は、一般市民と少し感覚を異にする、訓練（調教）済の動物です。そして「効率性の優劣が全て」という夢を信じて、自分達の正当性を疑わない集団だと言えましょう。

国際協調とか、世代間のコミュニケーションとか言う前に考えることがあるような気がします。

タバコの不良品

昨年位からだと思いますが、一mgタバコが出回りました。これはタールが一mgということですがそれまでのタバコより随分軽いものです。そしてあつと言う間に、近所の自動販売機で手に入るものだけでも数種類にもなりました。私も健康のためにと思い、長年愛用した国産のタバコから、一mgのものに変えました。銘柄は別として、数ある一mgタバコの中から外国製のものを選びました。

すると、それまで約十年の国産タバコとの付き合いの中では見たこともない、不規則品（不良品？）にこの半年だけで二度も出会いました。内容は説明しにくいのですが、とにかく、中身の一本だけがアンビリーバブルな状態なのです。もちろん吸うことは出来ません。

ことわっておきますが、私は怒っているのではなく、大変喜んでいるのです。というのも、御存知の方も多いと思いますが、最近、人気のテレビ番組で、珍しい品でプレミアムがつきそうなものを、そういう市場で（好きなマニアにかかったら、）幾らぐらいの値がつくかを、専門家が鑑定するものが

ありまして、例えば、身近なものとしては、五十円硬貨の中心の穴の位置がずれたものは、相応のプレミアがつくとのことです。同じ意味で、タバコの「不良品」も、物に よってはいいい線まで行く可能性があるので、私はこの不規則品を、大切に保管している次第です。

マニアの思い入れ（夢）が、一般人の夢を呼んだ例かと思えます。

「環境変化への対応」という枕詞

「環境変化への対応」という枕詞は、今、どんな企業にも、どんな業務にもしっくりきます。経済の世界では、企業は利益追求のための最適行動をとることを予定していますが、現実にはそういう企業の内部にいる者としては、とても、現在及び今後の環境の下で、全ての企業が最適行動を取れるとは考えにくく、むしろ「ある企業の選択した行動は、ある確率で吉凶を分かち、結果として、最善策を取り得たものだけが、企業として存在していく」という生物学的な説に共鳴します。

自省の念を込めて言えば、これまでの私は、所謂「パターン フォロー」的色彩の強い企業に属し、個人としても、特に要求も抵抗もしないけれども、会社業績の上がりに合わせて、確実に労働条件も向上してくるという居心地の良い世界で、フリーライダーを決めこんできたように感じます。今後の事を思えば、正に夢をみてきたのかもしれない。

俺の人生を誓う



名古屋鉄道㈱ 人事部

大 島 秀 一

〔プロフィール〕

おおしま ひでいち (30歳)

- 1965年 愛知県犬山市生まれ
- 1988年 名古屋鉄道㈱入社
鉄道・旅館などで研修
- 1991年 人事部採用担当
- 1994年 人事部人事担当
現在に至る

〈家族〉 妻

〈趣味〉 競馬

産政塾

産政塾への声がかかり、喜び勇んではいたものの、最初の勢いは何処へやら、終わってみれば三勝四敗（勝…出席、敗…欠席）の負け越しとなってしまった。サッカーで言えばハットトリック、野球で言えば猛打賞、しかもイチローの打率をも上回った訳ではあるが、勿論自慢できるものではない。折角のチャンスであったのに、何とも残念なことをしてしまった。特に、最後の会合に参加できなかったことは残念でならない。言い訳がましいが、たまたま、大事な会議が入っていたり、出張だったり、あるいは新婚旅行だったり、……ご勘弁願いたい。

「産政塾」の名を初めて聞いた時は、少々戸惑いがあったものだ。何と難しそうな名前をしている。産業の「産」に政治の「政」である。さしずめ大学の政治経済学部といったところか。苦虫を噛み潰したような顔をして、ああでもない、こうでもないなどと議論するのであろうか。そんな不安も最初の会合での塾長の一言で吹っ飛んだ。塾生のやりたいことをやりなさい。塾生の聞きたい話を聞きなさい。ここで起こったことには責任を持つ。何とも有り難いお言葉である。この塾の一つの意義は塾生の自主性を尊重し、興味のある話題が提供されることにある。

産政塾のもう一つの意義は異業種交流であらう。一つの会社にとっぴりと漬かっていた私には何とも刺激的な世界であったし、多くの社会人が同じようなことを思っているに違いないからである。是非とも未来の塾生達にも同じ様な運営をお願いしたいものである。

人生劇場

月やると思えばどこまでやるさ。それが男の魂じゃないか

こんな歌をご存じだろうか。言わずと知れた「人生劇場」である。

私はこの歌にいたく感銘している。何でも思い切りやればよい。仕事をするときは脇目もふらずに仕事をする。遊ぶときは、一心不乱に遊ぶ。何事も一生懸命やりたいものである。失敗してもいいじゃないか。度が過ぎてもいいじゃないか。

お酒

お酒ほど不思議なものはない。初めて飲んだビールは苦いだけで全く美味しいなんて思わなかったものだ。こんな物を毎日飲むようになるとは思わなかった。茶色、青、赤、緑、黄色、無色透明・・色とりどりのラインナップが揃っているが、いつも侮れない、つわもの揃いである。

また、飲むうちに段々気分が高ぶって気持ち良くなるが、飲み過ぎると翌日は辛いなの。三十にして、未だ適量がわからない自分が情けない。友好を深めるには、最高のアイテムであるし、ストレス発散には欠かせない。風呂あがりのビールなんてのは、たまらないものである。今後末ながく、うまく付き合っていきたいものである。

結 婚

人生の節目はいくつもあるが、社会に出る、結婚する、子供を持つというのが三大転機であると思う。そのそれぞれで決意を新たにし、再スタートをきるといったところか。考えてみると、この3つは結構短い期間で訪れるものだ。二十才から三十才が人生の絶頂点なのであろうか。いや、まだまだ・・・。

また、人生で主役をつとめる機会は、誕生、結婚、葬式の三回くらいのものであろう。そのうち誕生や葬式は、恐らく自身が主役という意識のないうちに執り行なわれることになるであろう。ということは、「結婚」は人生で唯一主役を認識できるメインイベントであることになる。

私も今年の七月に結婚の機会を得た。世間では、「結婚するまでが花」などと言われるが、まだ新婚なので楽しいに決まっている。お互いの時間や空間、財産までも共有し、生活するということとは、勿論初めての経験である。アメリカでは男は仕事よりも家庭を優先するといわれているが、自分ほどちらかなのか。家庭あつての仕事であるし、仕事あつての家庭でもある。比較するのはナンセンスなのかもしれない。子供ができれば、どうせ自分は邪魔者扱いなんて輩にだけはなりたくないと思いつつ、今のうちに精々女房孝行しておきたい。

料理の鉄人

「料理の鉄人」なるテレビ番組を知っておられるか。関東の某自動車会社がプロデュースしている

ので、産政塾生にはあまり受け入れられないかもしれないが、自分には興味深い番組である。三人の鉄人が毎週交替で挑戦者と料理の腕を競う。鉄人は殆ど負けない。鉄人と呼ばれるからには当然なのかもしれない。

世の中には、鉄人以外にも「天才」と呼ばれる人物が存在する。エジソン、ベートルベン、ピカソ、アインシュタイン、ブプカ、ベーブルース、日本でも長嶋茂雄、小室哲哉や武豊がそれであろう。みんな初めから天賦の才能を持っていたのであろうか。かのエジソンも「天才とは1%の才能と、99%の努力である。」と言っていたように、努力なくして成功することはないようである。ならば自分も可能性はあるのだろうか。天才とはいかないまでも「一流」に近付けるよう、頑張ってみたいものだ。

聞くは一時の恥ではない

飛行機が空を飛んでいる。「何であんな鉄の固りが空を飛ぶんだ？」今時こんな事を言う人もいなくなつた。飛行機が空を飛ぶこと自体、当然の事実として広く認識されてきたからであらう。でも、よくよく考えてみると、世間は何で飛行機が飛ぶのか分かつているのだろうか。恥ずかしながら、私には説明することはできない。ただ、話題にならないだけのことはあろうが、バカバカしいと耳も傾けないような人間にだけはなりたくない。知らないことは知らない、分からないことは教わる。こんな素直な気持ちを持ち続けていたいものである。

競馬場へ

私の好きなものの一つに競馬がある。と言うより、競馬ほど好きな娯楽はないといったほうが適切であろう。時には京都や東京まで遠征することもあるほどである。大きなレースが近付くと血が騒ぎ、徹夜になろうと競馬新聞を眺めることには時間を惜しまない。現時点では、これが人生最高の娯楽であり、仕事への活力でもある。

競馬の魅力は、何と云ってもそのギャンブル性にある。投票券（馬券）を握り締め、ゴール前で絶叫する。日常生活ではまず有り得ない状況ではないだろうか。加えて、配当金が貰えてしまうこともある。

「馬鹿」という言葉があるが、健気に走る馬の姿を見ると、大変失礼に感じてやまない。二十年位しか生きられない「馬」が十億円もすることを考えると、私は馬より下ではないか。せめて馬にバカにされないように楽しみたいものだ。

やせる石鹼

中国旅行に行った人は、必ずといっていいほど「やせる石鹼」なる物を二十四個買ってくる。別に非難するつもりはないが、二十四個までなら持ち込め、それ以上は権利放棄しなくてはならないらしい。何で二十四個なのであろうかと疑問を持つ人も少なくない筈である。

また、石鹼を使っただけで「やせる」とはどういうことなのであろうか。効能が真実であるとする

ならば、人体に害があるとしたか考えられない。被害状況が報告されていないところを見ると、効能は余りないのであろうか。

日本人は元来、流行に敏感というところがあるが、情報に踊らされる傾向があるように思われる。ある人がいいと言えれば自分も欲しくなる。これも中流意識の結晶なのであろうか。他人の情報ばかりに左右させるのではなく、自分の意志もしっかりと貫ける、そんな人間になりたいと思う。

おわりに

今年は激動の一年であった。文字通り大地が揺れた阪神大震災。オウム真理教による凶悪犯罪が暴かれた年でもあった。円は一時七十円台に突入し、上昇傾向を示した筈の平成不況も回復の兆しも見えなくなってしまった。フランスは核実験を再開し、全世界から非難をあびている。阪神大震災では人類の無力さを、オウム真理教事件では人類の浅はかさを、フランスの核実験では愚かさを思い知らされた。

しかし、我々は何をして来たのであろうか。阪神大震災で神戸が危機とあれば、全国からボランティアが集結し、みんなが喜んで募金した。オウムによる悪行の数々を許すものはいないであらう。フランスに対してもしかり。

「人類、捨てたものでもないな。」偉そうなことを言うようであるが、私の実感である。

深刻化する高齢化社会を担う社会人の一人として、情熱的にかつ冷静に責任をまっとうしたいと思う。益々、家庭が、会社が、日本が、そして世界が発展していくために・・・。

「思うこといろいろ」



日本電装労働組合

森 晴 哉

〔プロフィール〕

もり はるや (33歳)

- 1962年 京都市生まれ
- 1985年 日本電装株式会社
資材部にて、設備および非鉄金属材料の調達業務を担当
- 1992年 日本電装労働組合へ出向、現在に至る

〈家族〉 妻

〈趣味〉 バンド活動 (ドラム)、スキー

いざ文章を書くとなると、自分の話題の少なさに恥ずかしくなるが、「感じたこと、考えたことを自分の言葉で」という事務局の案内に甘えて、とりとめなく書かせて頂くことにした。まず、とっかかりは産政塾の会合で印象に残っていることからする。

—— サラリーマンの醍醐味 ——

第六回到岡本信也先生をお招きして、先生の「考現学」や徹底した日常観察の話をお聞きした時のこと。昼間の会合が終わり、いつもの通り夜の会合（あつまズイ？）で先生と赤い顔をしながら語り合っていた時、先生はこんな事をおっしゃった。「仕事の中でこれなら人には絶対負けないってものを持つべきだよ。それも無理するんじゃない、好きになって没頭できることをね。誰でもできることを誰でもできるようにやるだけじゃサラリーマンなんてつまらないじゃない。」

つまらないと、言われても困る訳だが、この言葉は気になる言葉だ。岡本先生は現代の街中のディテール（男女の腕の組み方とかゴミ箱のふたの形状とか）をとにかく地道に観察し、スケッチし、整理してそこから無意識の中に埋もれた現代の「当り前」をえぐって見せる、ということをやライフワークにされている方が、正直言って、凡庸な自分には先生のこの「考現学」はよく理解できなかった。よく、こんなつまらん事に物凄いパワーを注ぎ込めるもんだな、というのが本音だった。しかし、先生にとってはこれこそが、最も「つまる」ことであって、好きで没頭できることなのだ。それでは、自分はどうか。人に負けない自分の強み。時間を忘れて没頭できることなの。・・・残念ながら今の自分にはない。そもそも自分の、人より優れている所は何だろう。あるとすればそれを生かすにはど

うすればいいんだろう。

どんなことであれ、情熱を込めて事にあたる姿には魅力を感じる。成し遂げたい目標や到達点までには様々な困難がつきものだが、できない理由ばかり考えていると目標はますます遠ざかって行くし、それとは逆に、目標に強い憧れを抱く、つまり情熱を持てば物事は意外にラッキーな方向に展開することも多いように思う。もちろん情熱と共に努力も必要だろうが、努力を好きでやる人はいない。やはり、まず情熱ありき、だろう。自分にも趣味の世界では2、3没頭できるものはあるが、仕事ではどうか。

情熱を持って没頭する。—— どうせ、選んだサラリーマン人生。醍醐味を感じて過ごしたいなんてことを考えるこの頃である。

—— 人とのつながり ——

産政塾の活動でもう一つ印象に残っているのは、個性的な多くのメンバーと知り合えたことである。とかく仕事の付き合いでしか人間関係の広がりが見えない中で、この産政塾の企画は大変ありがたいものだ。別にヨイシヨするつもりではないが、産政塾の最大の意味は、この、企業や業種を超えた仲間づくりだと本当に思う。仕事でもプライベートでも人間関係は大切だし、人間関係の良し悪しは結果に直結する。

現在の組合専従となる前、入社して七年経験した購買業務の中で、仕入れ先との付き合い方に関し上司から言われたのは、礼儀を正すことと自分でやれることまで先方に頼まない、ことであつた。業

務の性格上、仕入れ先に厳しい要求をする事もある。厳しいことを言い、その上、品がない応対をしたり、必要以上に世話をかけていたのでは信頼感を失う。相手の営業マンにとっても値下げの社内説得は大変な仕事だ。お互い信頼できる人間関係がなければ交渉は難航する。

多少、脱線してこの購買時代の上司から学んだことをもう一つ紹介しようと思う。それはギブアンドテイクということだ。通常この言葉の使われ方としては、相手に対し、欲しいものがあるならまずこちらにメリットを与えろという、相手に求める形が多いが、そうではなく、よいアウトプットを相手から求めるならば、まず自分が相手に与えろ、ということであった。これも、仕事の中で良い人間関係を作っていく知恵なんだろうと思う。

そして、人とのつながりの大切さを更に痛感した（している）のは、現在の労働組合活動を通してである。それまでの職場では利益とか効率が判断のものさしであったが、労働組合にしろ人事部にしろ人が相手の仕事では、利益や効率よりも納得感や満足感がものさしであり、そこから生み出される人の活力がアウトプットになる。（もっとも人事部としては効率も大事ということだろうが）納得や満足のためには対話が重要であり、信頼できる人間関係が前提となる。組合活動も、組合を信頼してくれる人間関係の上に成り立っているし、実際それに助けられることも多い。

—— 紹介したい本 ——

さて、安易に書き出したものの、結論めいたことを既に述べてしまったと思うので、後半は、論文（？）の内容としては不適切と承知しつつ、塾生の皆さんには是非紹介したい本について述べたい。

本といっても実はマンガなのだが、題名を『風の谷のナウシカ』という。作者は宮崎駿氏。アニメなんてめったに見ない人でも『となりのトトロ』の作者と言えば分かるかもしれない。そもそも、マンガを大の大人に紹介するのは照れくさいところだが、個人的に大変好きな作品であることに加え、今年五月の『エコノミスト』という経済雑誌で、一橋大学の経済学部教授である野口悠紀雄氏が『ナウシカ』に関する記事を連載しているのを発見し、大学教授でも興味を持つ作品だったんだ、と意を強くして今回皆さんに紹介する次第である。

『風の谷のナウシカ』は漫画雑誌での連載開始が一九八二年で、最終回が一九九四年三月だから完結までに十二年間かかっている。この間に、一度アニメ化（大抵のレンタルビデオ屋にあり）されているが、アニメ版はマンガ版の壮大なストーリーを強引に短縮した感じであり、マンガ版をお薦めする。野口教授の記事をお借りして簡単にあらすじを紹介する。

舞台は「火の七日間」と呼ばれる戦争によって産業文明が崩壊してから、すでに千年がたった地球である。人類は、植物から発生する有毒ガス（瘴気）と巨大化した虫（王蟲・オーム）におびえながら生きている。二大強国トルメキアと土鬼（ドルク）の間に戦争がおこり、ナウシカが住む辺境の小国「風の谷」も巻き込まれる。土鬼は毒性植物を兵器として用いるが、制御不能になり、地上の大部分が毒ガス汚染地域（腐海）となってしまう。ナウシカは世界の根源的秘密を求めて土鬼の聖地「墓所」に向かい、最終的にこれを破壊する。人類は再生への道を歩み始める。く

（物語の時代から見て）古代の産業文明絶頂期の末に大戦争が起こり、大地が汚染される。その地で育った植物は大地の毒を瘴気という形で空気中に吐き出す。植物の生い茂る森は、一見、古代の人

類の過ちから発生した禍いのように思える。しかし、実は、植物は汚染物質を無毒化して体内に溜め込みやがて浄化された土に還る。森は禍いではなく地球の自己浄化機能だった。

以上のような設定が物語の前半で明らかになってくる。この点からも、このマンガが大人の読書に耐えうるものだと分かって頂けると思う。一つの空想物語に違いないのだが、現代の抱える諸問題、例えば産業化の進展と環境破壊問題や核兵器の脅威などを連想させる内容になっている。ただ、話は単に環境破壊と核兵器を批判するだけに止まらない。環境破壊をテーマにするだけなら、人類はやがて森の自浄機能に気づき森との共生を始める、というストーリーでも十分だが、終盤近くで、人類は既に汚染に順応した体質になっており、浄化の済んだ世界では生きられない、ことが分かり、更には、清浄な土地に人類を再度適応させる技術を持つ「墓所」をナウシカ自身が、古代世界を破滅に導いた兵器で破壊する、という結末に至り、一筋縄では理解しがたくなる。

このストーリーが途中から複雑化していく背景には、十二年の間の時代の急激な変化がある。この点については野口教授の記事でも詳しく述べられているが、環境問題にしても執筆開始当時と今日では内容が変わっている。少なくとも今日では「瘴気」が連想させるよう大気汚染はなくなった。また、二大大国の冷戦下における核の脅威も消滅した。恐らく、ストーリーに時代の問題意識を反映させようとして複雑になっていったのだと思う。そしてそのアイデアを練るために十二年もの長い年月がかかったのではないか。

また、土鬼（ドルク）帝国の「学者」（科学者）が「皇帝」（尊師）の指示の下、毒ガス兵器を開発する、とか、オーム（王蟲）という神聖視された虫、などと聞くと、何やら今年、世間に大きな衝撃

を与えた狂信集团のことを思い出すことだろう。実際、オウム教団の中で『ナウシカ』は教材の一つに使われていたという指摘もあるそうだ。オウム教団との関わりを探りながら読んでいくのも面白いかもしれない。

つい、好きなものにつられて長くなってしまったが、知的興奮を感じさせてくれる作品だと思うので興味のある方は一度読んでみて頂きたい。(注)

—— おわりに ——

産政塾の活動を通して、仕事を離れた人間関係を広げることができ自分にとって有意義な一年となった。とにかく人と会って語らうことは刺激であり、発見である。語らう中で、講師や塾生の皆さんの情熱をおすそ分けしてもらい、少しは自分の肥やしにできたのでは、と思っている。これから、自分の中には情熱を、そして、人との間には良いつながりを求めていきたい。

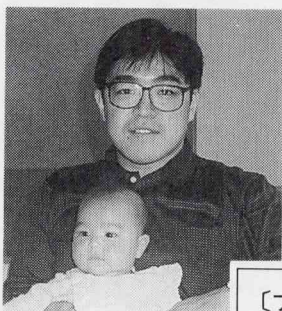
(注) ・ 宮崎駿『風の谷のナウシカ』徳間書店、全七巻

・ 一橋大学経済学部教授 野口悠紀雄「『風の谷のナウシカ』に関する主観的一考察」

『エコノミスト』95・5・9号、5・16号、5・23号



いま思うこと



㈱東海銀行 人事部

横 田 晴 充

〔プロフィール〕

よこた はるみつ (32歳)

- 1963年 東京都生まれ
 - 1986年 ㈱東海銀行入行
新宿新都心、新橋、各支店、資金
債券部を経て
 - 1993年 人事部企画グループ 現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女 (3才)、長男 (0才)
- 〈趣味〉 水泳、スキー

今年は、銀行に入行して十年目になる。この十年目に産政塾に参加させていただき、その参加を通じて、立ち止まって自分を見つめる時間を持てた。日頃あまり考えないこと、忘れていたことにスポットを当て考えたこと、同世代である他企業の同期生と交流できたことは大変有意義であった。

就職してから十年。仕事で様々な人との出会いがあった。

やや乱暴な見方をすると、サラリーマン、銀行員という職業を選択した時点で、社会人生活という大きな括りでは、ある程度方向は決まっていたのだろう。しかし、取引先のオーナー社長の人生観や商魂に感動したり、手本とすべき先輩や上司にも恵まれたりしたので、入行時とは違った意味で、この職業を選択したことに、満足している。

一方で、結婚や子供の誕生など自分の家庭のかたちを築いてきた十年でもあった。二十七才の時に結婚し、幸いにも、女（三才）、男（〇才）のふたりの子供も生れ、家族のかたちもできつつある。

ただ、今を見つめると、限られた時間を有効に活用していくとか、自分の時間を作り出していく面で反省すべき点がある。仕事を理由に家族との時間を犠牲にしたり、趣味や生きがいを見つけて情熱を燃やしていく姿勢に欠けるなど、人生を充実させるという点では足りないところが多いと感じているからである。

今後十年という期間を考えた場合、三十代の中堅サラリーマンの十年であるという面からも、これから家庭を築き上げていく十年であるという面からも、自分の人生においては大変重要な時期となるのだと思う。また、今回の産政塾で一番印象に残っている話であったが、幼児体験が人格形成におい

て大変重要であり、その経験で人間が出来上がってしまうという西洋心理学の考え方によれば、二人の子供の人格形成の面でも大切な十年でもある。三十代の自分が今後の十年間をどう生きていきたいのか、思いつくままに書いてみたい。

昨年のことだが、会社の部内旅行の幹事をやった時のこと。ありきたりの社内旅行、つまり土曜日に観光地巡りと宴会をやって一泊して帰ってくる、といった内容でセットしたところ、当時の上司にえらく怒られた。正直なところ、社内旅行なんて毎年お決まりのパターンだし、旅行会社に任せっきりにしたのだが、そこがいけなかった。

行員の福利厚生の所管部であり、レクリエーション活動で社内のモデルにならない立場にありながら、新しい企画らしいものが何もない、今までと同じなら無難というのが見え見えだ、遊びで企画をできない人間が仕事で何の企画ができるのだ、と散々おこられるはめになったのである。この時感じたのは、日頃、何かをやるにあたって、心の中に「ゆとり」とか「遊び心」といった余裕の部分を持つとうとする気持ちが失われているということである。余裕がないために表面的にかたづけてしまおうとする意識が無意識のうちに出てきて、そのためにあたらしいものをつくろうとか、何かを変えてやろうといった変革の気持ちが失われているし、人間の幅がせまくなっているのではないかと気付いた。

心の中に「ゆとり」とか「遊び心」をもつには、趣味を持つことがいい。

義兄は森林浴や山歩きを趣味としている。夏休みや連休と一緒に過ごすことがあるが、気持ちの上で仕事の切り離しが上手で、なかなかうらやましく感じている。今回の産政塾のメンバーにも、ヨッ

トや釣りを趣味としている方がいて、彼らを見ていても、余裕の部分とか幅の広さを感じた次第である。

正直なところ、どういうわけか会社に対する忠誠心は人一倍あり、仕事の中身は別にして、気持ちの上ではサラリーマンとしての今後の十年は今までの延長でよいと思っていた。しかし、自分としても、このあたりを改めない限り、とても十年後の自分が描けないのではないかと思う。これから長く続けられる趣味を見つけ、「ゆとり」や「余裕」の部分を広げて、人間の幅を広げたいと思う。

たまの休日など子供達が出掛けてしまったりすると、時間を無為に過ごしてしまうことがある。その一方で、妻は初めて東京を離れたというのに、一人でいろいろと楽しみを見つけて、友人も増えたようだ。家族からつまはじきにされていくようで、大変不安である。先日見たテレビのドラマで、リストラの悲哀を経験していく中年社員の会社生活と家族生活を描いたものがあった。エンジニアから販売の第一線に放り出される主人公、学生時代の友人との浮気に走りそうになるその妻、妻子ある男との結婚に踏み切る一人娘など、家族がバラバラになりそうになるが、娘の結婚を受け入れるあたりから、家族が再びつながっていくという内容でなかなか見応えのあるものであった。このドラマをみて、家族のつながりの大切さをおおいに感じるところがあった。

前述のとおり、幼児体験が人格形成において大変重要であり、その経験で人間が出来上がってしまうという話は大変印象に残っている。自分の子供にあてはめて考えると、日頃自分があまり子供にかまっていないことや子供が自分にあまり近寄ってこない現実があるため、背筋が寒くなるような内容であり、ショックですらあった。おまけに、家に帰ってから、自称「学生時代心理学を勉強してい

た」いう妻に言わせれば、心理学では有名な学説であり、変な大人になったらあなたのせいよ、てな感じでさらに追い討ちをかけられ、将来が本当に不安になってしまった。

昨年の夏休みに信州に旅行した時のこと。普通のサラリーマン家庭だが、海外勤務をしている時に覚えた楽器で、家族で演奏旅行をしているという家族の演奏を聞いて大変感激した。

プロではないので、やり直しなどしたり、ちょっとずれてしまうということもあるのだが、自分の好きなものに自信をもっている。自分がこんなに好きなのだから、その気持ちを他人、全然意識のない人達にも伝えたいという気持ちで、自信をもってやっている。その気持ちのなかには、金銭的なもの、ひがみや遠慮といったものがないので、聞く側にも、素直にその気持ち伝わってきた。それを家族でやっているところに大いに感動してしまい、自分の家族もそれに近付けたら、と思った。

その時感じたのは、楽器の演奏などというと、特別のことのようだが、もっと身近なことで家族と一緒にできないかということだ。例えば日曜日にパンを焼く、料理を作る（なかなか楽しいですよ）とか、家庭菜園で野菜を作るとか、何でもいから家族単位でできることがあるわけで、決して難しいことで無くていい。これが、家族の、子供の人格形成にいい面での効果があるのでは、と思い、最近やり始めたところである。

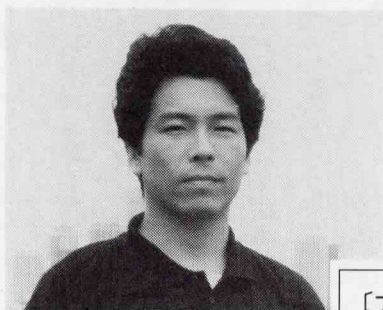
信州の旧中山道沿いの笠取峠というところに、江戸時代に徳川幕府が植えた松並木が残っている。当時、数百本あったものが、現在でも百数十本残っており、太くて高い幹が街道沿いに見事に並んでいる。

これからの十年を家族を大切に過ごすことにより、できれば家族と一緒にできる趣味を見付けるこ

とにより、人生をより充実したものにしていきたい。家族の一人ひとりも松並木のようなどっしりした力強さをもった人間になって欲しいし、並んでいる家族でありたいと思う。

今日は、土曜日。さっき夕食を終えたところだ。長女は、大好きな少女アニメを見ながら、ちらちら私のほうを見ている。パパと一緒に見ると言って、たのしみをしているやつである。家族単位の第一歩、テレビを一緒に見る。そして、風呂に入る。家族と接しながら、みんなで楽しめる趣味も見つけなくてはならない。仕事も段々と責任を持たされてきた。付き合いもある。これからの十年は、どうも一日三十時間ぐらいないと足りそうにない。

出会いはわが財産



中部電力労働組合

桑 山 完 治

〔プロフィール〕

くわやま かんじ (36歳)

- 1959年 愛知県岡崎市生まれ
 - 1978年 中部電力入社
(岡崎営業所料金課配属、以後同
営業所営業課・地域サービスグ
ループ勤務)
 - 1985年 中部電力労働組合岡崎地方本部執
行委員
 - 1989年 中部電力労働組合本部執行委員
現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女、次女、三女、母
- 〈趣味〉 吹奏楽 (組合専従になって以降は
疎遠)
- 〈モットー〉 何事も楽しさを忘れずに！

一、はじめに

第Ⅵ期産政塾に参加してから十カ月がすぎ、わかつてはいたものの卒業論文をしたためる時期になってしまった。

私も今年三十六歳という年になり、まもなく第二コーナーにさしかかろうとしているが、今回産政塾に参加する機会を得たことは、それぞれ生い立ちも就いている仕事も違う人と出会い、一時とはいえともに過ごした時間は、ただなんとなく仕事をし、なんとなく子供と戯れるといったごく平凡に毎日を過ごしてきた私にとって、とてもインパクトのある、貴重な体験であったと思う。

二、様々な出会い

考えてみれば、人は生まれた時から様々な形での出会いを通じ、良きにつけ悪きにつけ自らの成長の糧としてきたのではないかと思う。

こう考えたとき、果たして自分にとって出会いとは一体どういったものだったのか、断片的ではあるものの自らの記憶をたどって見ることにする。

人との出会い

私の少年時代で最も記憶に残っている出会いといえば小学校五年生の二学期に岡崎市から名古屋市小学校へ転校をしたことである。

私にとっての転校とは、入学してからの交遊関係を一切キャンセルし、入学以来培ってきた交遊関係のある人の輪の中にいかに飛び込み、受け入れてもらうのかという非常に人間関係に採まれる機会ではなかったかと思う。

また、名古屋弁と岡崎弁という言葉の壁も非常に大きな問題であり、隣の席の子と話をしている時に「通じない」という一種のカルチャーショックを受けることが何度かあった。

こうした苦勞（本人は非常に努力したつもりであるため）は、人と出会った時の対応を慎重なものとし、今でもこの思いが潜在的に身についているのではないかと思う。

次に、どんと時を経て社会人になってからの出会いを考えてみると、入社して最初の出会いは同期入社の仲間、そして配属先の先輩や上司との出会いであった。

同期入社のうち男子六人が同じ課へ配属され、一年間検針（各家庭の電気メーターを見て回ること）をしたが、同期生同志は毎日同じ行動をとっていくことですぐに連帯意識のようなものが芽生えたものの、職場の中では自分の父親くらいの人からひとつ年上まで幅広い年齢や、役職といったものがあり、どちらかというと同期生間での繋がりが非常に強く全体での連帯意識は稀薄だったような記憶が残っている。

その反動からか、一年後に人事異動で六人がバラバラになり、一人新しい職場に配属されたとき、人間関係を一から作り直すこととなった。

個人的には、職場というのは各課ごとに業務を遂行していくことが基本になっていることから、人事異動によって配属が変わるごとに同様のことが繰り返され、人間関係の輪を拡め、個人の資質向上

に寄与してきたのではないかと思う。

（そうはいうものの私は二十五歳で組合専従という道を選択したことから、転勤は同じ営業所の中で二回しか経験をしていない。）

音楽との出会い

中学校一年の時クラブ活動で吹奏楽部に入学したことが音楽との出会いの始まりであった。

正直に言えば単に必修科目（全員がかならずやらなければならない）のクラブで吹奏楽部に入学し、課外クラブではテニス部に入学したのだが、時の吹奏楽部の顧問の先生から、「テニスはレギュラーになれるのは限られており、なかなか初心者ですぐになれるものではないし、試合になればせいぜい二人の仲間でしか試合はできない。しかし、吹奏楽はすぐにレギュラーだし、大勢の仲間の力を合わせて一つのものができる。」という甘い誘惑に負けたのが事の始まりであった。

それからの私は凝り出すとのめり込む性格もあり、また、各楽器の音色が重なりあって醸し出すハーモニーのなかに自分も加わっているという優美感からなにをさて置いても吹奏楽という気概に燃えていた。

お陰で吹奏楽コンクールをはじめ、名古屋祭りのパレードやドリル演奏（隊列を組んで演奏しながら体形をいろいろと変えていく）、名古屋市の中学校陸上競技大会での演奏などいろいろな場面に出席することで、他校の仲間とも出会いの機会を持つことができた。

また、入社してからも軽音楽部に入り施設慰問などとしてきたが、もともとは中学校の時の顧問の

先生との出会いがその後の私の人生に非常に大きな影響をもたらしてくれたものと感謝している。

社会との出会い

私の社会との出会いはアルバイトであったと思う。

私の父は私が小学校一年の時交通事故に遭い他界してしまい、以後三つ下の弟と母の三人で非常に貧しい生活を送ってきた。

しかし、小・中学生、高校生と成長していく中で、物欲というものは押さえ難いものがある一方で、買ってもらえない腹立たしさも拭い切ることができず、「それなら自分でなんとかしよう」と思い立ったのがアルバイトであった。

小学五年生のとき、新聞配達（夕刊だけ）をしたのを皮切りに、以後寿司屋の出前や八百屋の手伝い、ラーメン屋、ステーキハウスといろいろなアルバイトをやってきた。こうしたアルバイトをする中で、自らの労働力を提供し、かわりに賃金を得るということの大切さや責任の重さ、さらにはお金の重さなど多くのことを学んできたと自負している。

また、一方ではアルバイト先の店主や多くのバイト仲間との出会いも今では良い思い出となっている。

労働組合との出会い

私と労働組合との出会いといえば、入社後まもなく組合の青年部（当時は青年婦人部といっていた）が主催した新入組合員歓迎会であった。

この行事については自ら進んで参加したのではなく、当時職場で運営委員をしていた先輩から、「新入組合員のために開催するのだから、参加するのは当然である」というきつい一言からの参加ということであり、結果は「なにを好き好んでせっかくの日曜日にまでこんなことをしていなければならないのか。」「もう参加はしない。」という意識に繋がってしまった。

しかし、人間何がきっかけで変わるのか分からないからおもしろいものであるが、三年目に順番とはいえ自分が運営委員となり、それまで職場ではまったく顔さえ合わせたことのない違う職種の仲間と出会い、いかに参加してもらった人に楽しんで貰えるのか真剣に論議を重ねながら一つのものを企画し運営していくことの楽しさを味わってしまい、気がつくと五年間も運営委員を続けていくこととなった。

この間の出会いは支店の中だけに止まらず、本部大での行事なども通じて管内という職場にいたのでは言葉を交わすこともなかったであろう多くの仲間との出会いの機会も得ることができ、個人にとって非常に大きな財産になったと思う。

私は先にも述べたとおり、二十五歳で組合専従という過酷（？）な道を選んでしまったが、その背景には「出会い」を求めたことも否めない事実ではないかと思っている。

地域での出会い

私もマイホームを持って現在の地に住んではや四年が経つが、今だに隣近所の人との繋がりが持てないでいる。

組合の仕事に事欠いて地域の付き合いをすべて妻にまかせっぱなしになっているためである原因は明白ではあるものの、これまで自ら溶け込む努力をしてこなかったことも事実である。

先日の子供の授業参観にいったが、子供のクラスメートの親の中に私が会社以外で知っている人は一人もおらず、回りで談笑している人を見たとき、本当にこのままで良いのかと改めて考えさせられてしまった。

いまの所に居を構えた限りは生涯この地で暮らしていくことになるものの、このままでは道で擦れ違った人がどこのだれかも判らないといった最悪の事態をも招き兼ねないと思う今日この頃である。

三、おわりに

ただなんとなくとりとめもないようなことばかり綴ってきたが、人にはそれぞれ人生が違うように「出会い」もまたそれぞれにあり、またその出会いに対していろいろな思いが込められていると考える。

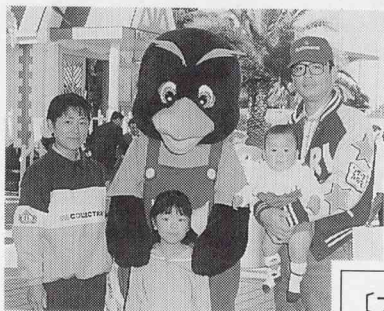
私自身記憶に残る出会いもあれば何気なく過ぎ去ってしまった出会いも数多くあるのも事実である。NHKの大河ドラマで「八代将軍 吉宗」が放映されているが、ここに登場してくる尾張藩主 徳川宗春との出会いは、吉宗の儉約型統制経済に対し消費型自由経済で対抗するいわゆるライバル的な

出合いであり、一方では、時には兄であり、時には傳役であり、ご意見番である加納久通のような人物との出合いも描かれている。

今、私は労働組合の専従執行委員という立場にあり、おそらく職場にいるときとは比べようもなく様々な出合いの機会を得ていると思っているが、こうした機会をこれからも大切にし、さらには地域においてもこうした出合いの場を自ら求めていきたいものであると考えている。

最後に、今回産政塾に参加させていただき、参加できた会合は少なかったものの、多くの方と出合いを通じ、いろいろな面で勉強させていただくことができ、また一つ大きな財産ができたものと事務局ならびに塾生の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

「自分のおやじ」から「自分がおやじ」へ



全トヨタ労連

石川 勝 幸

〔プロフィール〕

いしかわ かつゆき (32歳)

- 1963年 山口県宇部市生まれ
(中学1年まで)
- 1977年 徳島県三好郡三好町へ
(中学2年から)
- 1982年 トヨタ車体㈱入社
(富士松工場工務部部品課、刈谷
工場工務部部品課にて主に部品
手配業務を担当)
- 1994年 トヨタ車体労働組合 上部派遣役
員 (全トヨタ労連)
現在に至る

〈家族〉 妻 (尚美)、長女 (いづみ)
長男 (裕介)

〈趣味〉 数えあげればキリがない。つまり、
固定したものはない (広く浅く)

〈モットー〉 心はいつも少年のままで

◆はじめに

最初にお断りしておきたいことがある。

小生、文章構成力が乏しいため、このあとの文章に何かと意味不明な点があるかと思うが、気にせず読んでいただきたい。

◆生い立ち

小生がこの世に生を受けたのは、昭和三十八年六月十一日、長州は山口県の宇部市である。そう、セメントで有名な地である。

中学校一年（十三歳）まで当地で学力に励み？、母方の父親（平たく言えば爺さんである）が亡くなったのを期に、中学二年の春、徳島県の三好町に移り、高校を卒業するまでこの田舎で過ごすこととなった。

言い忘れたが、小生は一人っ子である。とは言っても前後一つ違いの従姉弟がいたため、中学一年までは姉弟と変わらない環境で育ってきた。何をやるにしても兄弟的な扱いで、自分が一人っ子という感覚は全くないと言っているほど感じなかった。今思えばこうした環境であったが故に今の自分があるのかもしれない。ただ、このことがこのあとの内容にはあまり関係しないことも付け加えておく。

◆「ひとつの夢」の十代

小学校五年頃から高校卒業するまで、妙な「夢」が自分をかき立てた。当時、小生の「夢」は芸能人になること。芸能人にもいろいろあるが、ここで言う芸能人とは、お笑い系である。いま思えば非常に馬鹿げた「夢」であるが、当時はこの「夢」なくして自分の進むべき人生はないと思っていたのだ。

なぜこの「夢」を捨てたのか。答えは簡単である。叶わぬ「夢」であったことと、歳をとるにつれて現実の社会が見えてきたからだ。

あの時の「夢」が叶っていたら、「キムタク」ならぬ「イシカツ」と呼ばれて、ハーレム状態だったかもしれない。(笑) 現実の社会で暮らす今となっては想像するに及ばず。

かくして、小生の「夢」は儚くも高校卒業を期に非現実のものとなり、過去の産物となってしまった。

ちなみに懂れていた芸能人は「ザ・ドリフターズ」である。参考までに。

◆「おやじ」との別れ

高校卒業の年、いろんな就職先に目が眩み、悩みに悩んだあげく最終的には現在のトヨタ車体に入社することとなる。昭和五十七年の四月である。

就職する直前におやじがこう言った。「一年間は辛抱せいよ」「自分は犠牲になっても他人には絶対に迷惑をかけるな」と。若気の至りもあった小生は、おやじの言う通り、「一年持てばいいほうだ」とその時は思った。

入社してみると、何だかんだであつという間に一年や二年が過ぎ、おやじが言ったあの言葉もこの時すでに無用のものとなっていた。

入社して三年目の十二月、突如としておやじとの別れが来る。元々、田舎から出てきた小生は寮生であつたため、家族とは別の生活をしていたのは当然であるが、ここでいう別れとは、永遠に会うことの出来ない別れである。おやじの死。ガンだった。

おやじが亡くなって強く思うこと、それは一緒に酒を飲めなかった悔しさである。就職する前おやじが言った無用となつたはずのあの言葉が遺言のように今も頭の中に残っている。

このあと、もうひとりのおやじとの別れが来る。

二十五歳になった小生、そろそろ自分の財布のヒモを閉めてくれる連れが必要と判断し、四年間付き合ってきた今のカミさんと結婚することになった。

結婚式を三か月後に控えた八月のある日、もうひとりのおやじの別れが来た。カミさんのおやじである。小生のおやじと同じガンであつた。せめて片方のおやじでもいてくれれば……。結婚式の両親への花束贈呈の時、双方のおやじがいらない光景は辛いものがある。

結果的に何が言いたいかと言うと、「後悔先に絶たず」である。自分がやりたいことがあれば、その目標が何であれ、今やらなければ絶対後悔してしまう。過ぎ去ったことを振り返り、「あの時こうすればよかった」などと悔いの残る人生を過ごさないためにも、今を大切に、「将来自分はこうありた

い」という思いを持ちながら楽しい人生を過ごしたいものである。と、小生自らに訴えたい。わかっていられるけど……。

◆一人の妻と二人の子供

小生には一人の妻と二人の子供がいる。ごく一般的な家庭、労働組合用語で言うならば、標準労働者にあたる。子供は上が女で（この論文を書いている時点は六歳）下が男（同六か月）の合計四人の家族である。七転八倒を繰り返しながら、なんとか生活している。毎日、子供の面倒を見て苦労させているカミさんには言葉には出さないが「ありがとう」の一言に尽きる。加えて、このおやじの面倒も見てくれていることにも。

子供たちが将来何になり、どうゆう人生を送るのか、今の時点では皆目見当が付かないし、思いたくもない。ただ、彼らが成長していく過程で小生が遭遇した場面には決して遇わせたくない。そのためにも今を大事して悔いの残らないように、親として何ができるかは、これからカミさんとじっくり考えていくつもりだ。

将来、彼らが自らの道を決めた（決める）時、小生はこう言いたい。

「一年間は辛抱せいでよ」「自分が犠牲になっても他人には絶対に迷惑を掛けるな」と。

そして、このおやじと一緒に飲もう。

最後に小生のカミさんに一言。「夫婦」とは俗に言う「空気みたいなもの」と年輩の方がよく言うが小生は違う。思うに「夫婦」とは「ボケとツッコミ」だ。旦那はボケでカミさんはツッコミ。（逆の場

合もあるが状況が違う)

長い人生からみれば、まだまだスタートしたばかり。お互いが「おもしろい夫婦」と思えるようになるまで、「ボケとツッコミ」で歩んでゆこう。

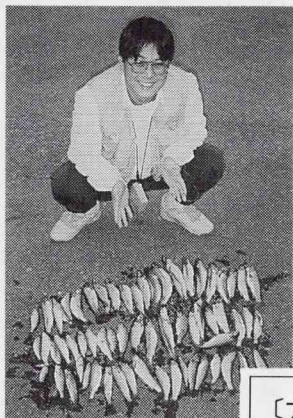
◆おわりに

産政塾に参加して、小生は「無形の信頼」を得た。異業種、年齢差、生まれた育った環境、それぞれ違ったものを抱えながら、自分の人生観をしっかりと持っている。そんな仲間といっしょに見て、聞いて、語って、飲んで、歌って、騒いだことは、小生にとって、大きな成果であり、形に出来ない信頼関係が生まれたと判断する。(したい。)

ともかく、わが人生の一ページに成り得た(ちょっとオーバーな表現)この産政塾や様々なカラーを持った第Ⅵ期生の仲間達に感謝し、これからも善き同期生であることを祈念する。

最初にお断りしたように、文章上意味不明な点は文章構成力の乏しさと判断していただくとともに、論文ではなく作文になったことをお詫びし、最後までこの作文を読んでいたいた「あなた」に感謝いたします。

親への製造物責任法 適用についての試案



(財)中部産政研

佐 宗 正 典

〔プロフィール〕

- さそう まさのり (33歳)
- 1962年 愛知県岡崎市生まれ
 - 1986年 アイシン精機㈱ 入社
工場では新製品進行管理を担当
 - 1992年 最初の異動が労働組合
単組から全ト、中部産政研へ
 - 1993年 31歳にて所帯を持つ
- 〈家族〉 妻1人(31歳)、娘1人(1歳)
’96年春から両親と同居予定
30年のローンレンジャーへ
- 〈趣味〉 2月～6月 溪流釣り
(アノゴ イワナ ヤマメ)
6月～9月 アユ釣り
9月～2月 海釣り
(メバル アイナメ カレイ etc)

はじめに

一九九五年七月、消費者保護の観点から製造物責任法（PL法）が施行された。これは製造・販売された製品の欠陥により購入者や使用者、また第三者についても身体被害や財産的損害を受けた場合には製造者や販売者が損害賠償の責任を負うというものである。

私はこの法律を人間の製造者である親にも適用すべきであると考えている。

どうも最近のいじめ問題や教育改革に関する論議やリバイバルで視聴率を稼ぐ「三年B組 金八先生」でのトーンを聞くと「チョット待てよ。それは違うんじゃないの。」と思えるところがたくさん発見される。

昨年の十月に私も人の親となり、いままでとはモノの見方が変わってきているのかとは思いますが、最近そこはかとなく考えることを綴ってみたいと思う。

学校に多くを求めるのは危険である

昨今の学校教育を取り巻く問題、具体的にはイジメや登校拒否、受験戦争の激化・低年齢化、非行やブルセラ・テレクラ売春などなどは自分が学生・生徒であった時代に比しても凄まじいの一語につきるものがある。それに加えて自分の子供が現在もしくは近い将来そういう渦中に進まざるを得ないとすれば、勢い「学校の管理責任は、教育委員会は何をやっているんだ、文部省はどうした、」とい

う声が大きくなるのも無理からぬ話で、特にいじめ自殺問題では学校の管理責任者として校長がマスコミの矢面に立たされている場面を何度も見るようになった。

そういう声に応えてというわけかどうかは知らないが、最近では文部省のみならず政党、経済団体・労働組合まで加えての教育改革論議が盛んに行われるようになってきた。そこでの対応策を見てみると「初等教育段階での道徳的資質の向上」「人間教育の重視」「自立の精神」「情操と躰け」「人格教育」というような言葉が多く見られ、三十人学級・二名で一クラス担当など教員を増やすことによつて、より一層の学校教育の充実を求めるものとなっている。

だが、「チョット待てよ！」である。思い起こすのは戦前の戦争礼賛教育と最近のオウム出家信者の子供たちのサティアン学校のことである。片や「お国のため」もう一方は「尊師のため」と対象は違うものの、共通点は特定の指導者・組織・思想にとつて「価値あること」「意味あること」「行うべきこと」という判断基準を子供の時代に効率的に学校の中で教え込もうとしていたことである。

そして、内部で携わっていた者は当然のこととして（あるいは仕方がなくかもしれないが）役目を果たし、結果的にはとてつもないことの片棒を担ぐことになってしまったといつていい。加えて日本では論議を尽くさずに雰囲気で物事を決めがちで、一端方向が決まり走りだすと方向の修正ができにくく、ブレーキもかかりにくいということもある。

「先の戦争の反省に立ち、新しく創られた戦後教育においてはそんな愚かなことは決して行わない。」と言えるのかもしれないが、一歩まちがえば、どうなるかは全くわからない。教育は本来こういう危険性をはらんでいることを十分認識すべきだろう。

道徳や躰け、善惡の判断基準など何から何まで期待して責任を放棄して学校にまかせることは大変危険である。逆にきわめて、限定的（知育・体育）なものに止めるべきだ。

製造物責任

学校教育に対してあまり多くを期待しないとすれば誰がそれを担うのか。とりわけ将来に対する考え方の基礎をつくる上で大切な初等教育の段階においては、やはりその子供の製造主である親が全責任を負うことになる。

「それなら、今でも親権という権利もあるし、養育の義務もあるじゃあないか。」「高い授業料を出して塾にも行かせているし、月に1度はレストランにも連れて行っている。夏休みには必ずキャンプにも行くし……。」というような反論が聞こえてくるようだ。

しかし、そうした空間的・物理的・金銭的な面だけの充足だけで製造物に対しての責任が果たせるかといえば、「無いよりもあった方がまし」という程度で絶対的な条件ではないと思う。時間的な面でもただ一緒に過ごす時間が長ければそれでもいいというわけではなく、そこでどれだけ精神的な葛藤や感動が共有できたかということに係わってくるのだろう。

それにも増して、「自分たちの行為によってこの世に誕生させた自分の子供に対しては、現在・将来ともに全責任は自分にある。」というくらいの気概を持って接していきたい。決して「生まれた時代が悪かった。」とか「先生が悪い、学校が悪い、社会が悪い、政治が悪い。」などと他責にするのではなく、自らの責任として捉え、もし仮に人の道を踏み外すようなことがあれば、自ら決着（生き死に

を含めて）をつける覚悟で接していききたい。親子が殺し合うような世の中を望んでいるわけではないが、子供が極道になればその責任は親が果たし、捕まって終身刑になれば親も同等の刑に服するくらいの気概が必要なのではないかと思う。

「親父は親父。オレには関係ないもん。」「息子には息子。違う人格だからどうしようもない。」「クールで現代的な親子関係だといってすますわけにはいかない。「何をいっても聞いてくれないから・・・。」「帰ってくるコファミコンばかりで・・・。」あきらめともつかない声が聞こえる。紛れもなく製造物責任の放棄に他ならない。

星 一徹 再考

物心つかないうちから大リーグボール養成ギブスをつけられ、おもちゃといえは野球ボールだけ。長屋の板戸の穴から外の立木に向かって百発百中で通す制球力。暗くなるまで親子で練習した帰りに空にさんざんと輝く宵の明星にむかって「あれが巨人の星だ。」「うん、頑張るよ。父ちゃん。」

毎晩冷や酒を飲み、怒るとちゃぶ台をひっくり返す。口よりも先にげんこつが飛ぶ。ちょっと、いや、だいたい難のある父親像。元巨人軍の一軍で神様川上と共にプレーしたという過去の栄光に捕わられず、日雇いの仕事に精を出し懸命に一家を支えるひたむきな姿。

その裏で、どちらかといえばなおざりにされている姉のあき子。あまりにも厳しい親子関係の中で弟のことを心配し、電信柱のかげで思わず涙ぐむ。

昭和四十年代は社会全体がそうだったのかもしれないが、豊かになってしまった現代にはない、熱

い親子関係とか子供に対する情熱・真剣さを感じる。

当時の思いとしては、「とんでもない親父だ。子供を自分の何か持ち物のように扱って、自分がやれなかった望みや自分を葬り去った球界に対しての恨みをこどもに託すなんて。オレはいやだな、こういう父親は。」という気持ちでいっぱいだったのだが、あまりにも覚えてしまった現代の親子関係を目の当たりにするにつけ、「ちょっと極端だけど、こういう父親像もあるな。」という思いになってきた。

改正製造物責任法

第一条 この法律は、製造物の欠陥により人の生命、身体または財産に係わる被害が生じた場合における製造業者等の損害賠償の責任について定めることにより、被害者の保護を図り、もって国民生活の安定向上と国民経済・社会の健全な発展に寄与することを目的とする。

第二条 この法律において「製造物」とは、製造又は加工された動産のみではなく、ひろく人間も含めた生物全般も含めることとする。

2 省略

3 この法律において「製造業者等」とは次のいずれかに該当する者をいう。

一 省略

二 省略

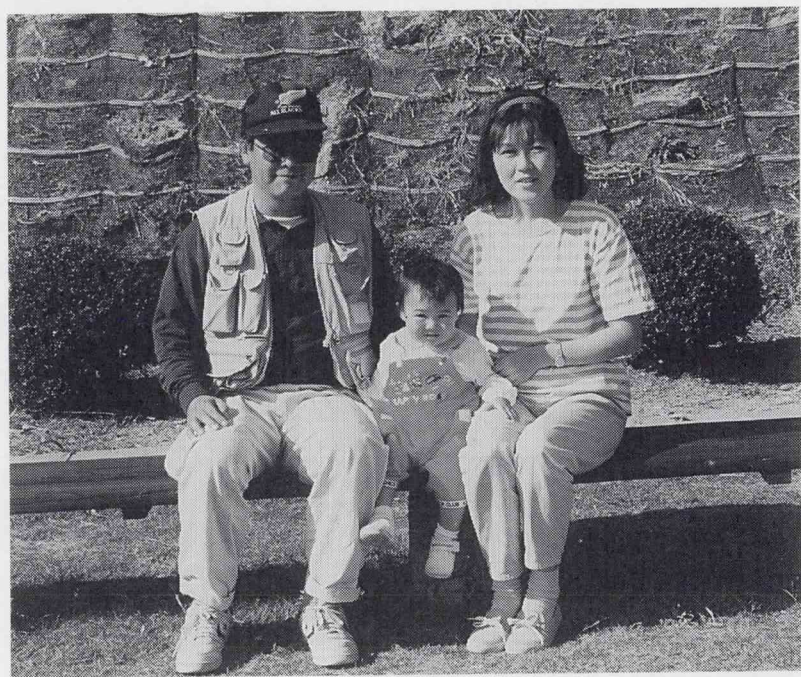
三 前号に掲げる者の他、生物においては、その養育義務を負う者。人間においては、親権

の存する者

第三条 製造業者等はその製造、加工、輸入、教育、躰け等の欠陥により他人の生命、身体又は財産を侵害したときは、これによって生じた損害を賠償する責めに任ずる。と同時に生物については製造業者等の手によって損害と同等の責めを製造物に課すこととする。
以下省略

おわりに

「三つ子の魂百までも」第5回会合の青木先生の言葉をかみしめて
全国の新米お父さん、お互いに頑張りましょう。



アメリカ10日間の旅



勸中部産政研 事務局長

十 亀 義 則

〔プロフィール〕

そがめ よしのり (59歳)

- 1936年 愛媛県生まれ
- 1963年 トヨタ自動車工業へ入社、元町工場に勤務
- 1967年 トヨタ労組執行委員、全国自動車中央執行委員
- 1970年 元町工場へ職場復帰
- 1973年 全トヨタ労連第1組織局長、トヨタ労組・全トヨタ労連の副委員長などを経て
- 1986年 9月より全トヨタ産政研事務局長
- 1988年 財団設立から現在に至る
- 〈趣味〉 庭の草花いじり
- 〈モットー〉 相手の立場に立って物事を考える
- 〈家族〉 1男1女は独立し、妻と2人暮らし

☆楽しかったニューヨーク、ワシントンDC観光

一九九五年五月十三日から二十三日までの十日間、アメリカを訪問する機会に恵まれた。メンバーは以前アメリカ大使館に勤めていた成島義夫氏を案内役に、産研センターの岩崎馨氏と三人で、コースはニューヨーク、ワシントンDC、ピッツバーク、ケンタッキー、ロサンゼルスを廻ってきた。

私にとっては今回の訪米はそれほど大きな目的があった訳ではなく、友達がいる間に一度チャンスがあればぐるーと廻りたいなあと思っていたので、岩崎氏からお誘いを受けたのはうれしかった。しかし、産研センターは労働組合の財政調査をしており、AFL・CIO（全米労働総同盟産別会議）、UAW（全米自動車労組）、USWA（全米鉄鋼労組）といった組織はどうしても訪問したいということであった。そこで行動の仕方として週末の土日を観光に当て、ウィークデーにはそういった組織を訪問することで日程調整した。そして最初の週末は東海岸のニューヨークに滞在し、最後は西海岸のロサンゼルスで終った。

私が初めてアメリカの地を踏んだのは、今から二十一年前の一九七四年一月末でその時ニューヨークは吹雪であつたし、折しも第一次オイルショックで自動車産業も不況の真ただ中にあり、UAWの仲間が数十万人もレイオフされている暗い時期の訪問であつた。そして、資源節約のサマータイムが続いていたし、午後三時頃になると一部のガソリンスタンドにノーガスの貼り紙を見たのを覚えている。

それに比べて今回は日米自動車交渉の問題はあつたにせよ、米国の景気は良く、気候もよい五月晴

れの五月十三日（土）にニューヨーク五番街のヒルトンタワーズに泊り、セントラルパーク、ロックフェラー・センター、セントパトリック寺院、ブロードウェイ街を散策し明るい中でスタートであった。初日の夜は梓という日本料理店で無事を祈って乾杯した。

五月十四日（日）は遅い朝食をとっていると成島氏の知人で国連代表部公使の堀内光子さんが観光案内につれていってくださるというビックニュースが入った。休日に申し訳ないと思いながらも、自家用車のトヨタカムリに乗せていただき、マンハッタンのミッドタウン、グリニッチ、こゝ二年ぐらい前から治安が良くなったと言われるハーレムなどを通り、ワシントン・スクエアから眺め、ソーホーでの買物、ウォール街、シティホールを抜け、バッテリー公園を見ながら、イースト川のほとりのシーフードレストランからブルックリン橋を横目にマンハッタンの摩天楼群や遠くに見える自由の女神など絶景であった。もちろん、五十周年を迎えた国連本部の見学は職員の出入口から入り、観光では見れない所までご案内をしていただいた。

五月十五日（月）はニューヨークからワシントンDCへの移動であった。さすがビジネス王国アメリカだなあと思ったのは、ひんぱんに発着する通勤電車なみのエア・シャトル便でちよつと早く空港に着いても待ち時間なしで先の便に乗せてもらった。座席にはコインを入れれば話せる電話機、あつという間のフライトでワシントン・ナショナル空港に到着し、タクシードボトマック川やジェファソン記念館をながめながら、ワシントン記念塔では五十本の星条旗はオクラハマの連邦ビル爆破事件で犠牲になった方々への弔慰を表わし半旗がかゞげられていた。ワシントンはニューヨークに比べてビルの高さは低く、横に長いのが特徴とタクシートの運転手から聞いているうちに、ザ・キャピトルヒ

ルトンに到着した。その日の夜はシーフード店で日本大使館の一等書記官岡崎淳一氏と電機連合の役員で労働省を通じて派遣されている若林秀樹氏の二人を夕食に誘い慰労した。若林氏はアメリカのODA（政府開発援助）を勉強していると言っていた。

☆米労働界の産別組織に合同の動き

五月十六日（火）の朝のCNNニュースが、日本メーカーを米国の高級車市場から締め出す制裁リストを発表したと報じていた。そのような状況の中を午前十時にUAW国際部を訪問した。応対してくださったのは国際担当のSTEVE BECKMAN氏で、財政のことはこの資料にくわしく書いていると差し出し、一カ月の組合費はアワレートの二時間分だと言っていた。そんなに安いのかとも思った。生々しい話とは思ったが、こちらから対日制裁リスト発表に対して遺憾の意を表して、UAWのコメントを求めたが、高級車のためUAWメンバーは買えないし、金持ちが乗る車で、それほど影響しないとうまくかわされた。しかし、民主党クリントン政権下で自動車業界の労使が一体感で対日自動車問題にかゝわっているのは確かのようにだ。彼は、むしろ今のUAWの課題は日系自動車工場や部品メーカーの組織化であると強調していた。そして、今年の大会で会長、書記長が交代することも告げていた。

その日の午後はAFL・CIOを訪問した。応対してくださったのは、かつて来日したことのある教育担当のSUSAN M. WASHINGTON女史で、岩崎氏とは面識があるらしく自分の部屋へ通して、組合費に関する資料や会計報告など数字の入っているものを沢山出してきて説明してくれた。そ

して組合員の教育関係資料も取り出してきて、教育の必要性を強調していた。また、U S W A と U R W (全米ゴム労組) とが近いうちに合同する動きもあると話していた。おみやげに組織拡大のバッヂやオリジナルのコップをいただき A F L ・ C I O のビルを後にした。

五月十七日(水) 朝早く起きてワシントン広場まで散策し、ビジネスマンがドラックスストアで買い求めていたパンとコーヒーを朝食に買った。二ドル程度であった。ホテルでの朝食は十ドル程度、日本食なら二十ドル以上することを考えると安いと思いつながら食べた。そして、この日は鉄鋼の街、ピッツバークへの移動日であった。機内では鉄鋼労連出身の岩崎氏がここでの聞き取りがポイントと思ったのか、質問する内容を細かくチェックしていた。ピッツバーク滞在はハイアットホテルであった。ホテルからのながめはすばらしく、手前にはホッケー場の白いドームが見え、その先は新しい高層ビルが林立し、再開発された活気のある町のように思えた。

☆かつての鉄鋼の街が再開発

五月十八日(木) は、いよいよ U S W A (全米鉄鋼労組本部) を訪問する日であったが、天気は悪く大雨が降っていた。ホテル前のホッケードームの電光掲示板は今日の試合の対戦相手を知らせていた。

明日の訪問先、T M M (トヨタ・モーター・マニファクチャリング U S A) のことが心配になり、斉藤雄三副社長に電話したが本日まで出張中だと秘書の方が言っていた。やむなく F A X で念のため明日の訪問時間を知らせておいた。

そうこうしていると出発する時間になり、タクシーでUSWAを訪問した。自前の立派なビルは川の流れが一望できる三角州の一角に建てられていた。九階までは賃貸していて、十階以上をUSW本部が使っているとのことであった。応対してくださったのは国際担当のJERRY FEMANDEZ氏、十階の個室からは観光船が行ききしているのが見える絶景の場所であった。セルフサービスのコーヒーを飲みながら、ゆったりした気持ちで白板を使って説明してくれた。かつては活況をていた鉄鋼の街で、倉庫などあったが、産業の空洞化が進み停滞しかけていた。そこを第三セクターの再開発によって企業の研究施設、新事業やハイテク、ベンチャービジネスなどの成功で新しいビルが林立し、生まれ変わった街になっているとのことであった。そして国際空港も三年ほど前に開かれたとも言っていた。組合費は平均月収の一・三％か、アワレートの二・五時間分の低い方をとるので平均すると一カ月一人当り二十八ドルぐらいになると言っていた。白板に、その組合費の使い道を流れ図方式に書いてわかりやすく説明してくれた。

そして、ここでも特記すべきはURWとの合同の話しを聞かされ、UAW、IAM（国際機械工組合）とも友好関係を保っているとも言っていた。ホテルまでの帰りは折角の機会であるので、ダウンタウンを買物がてら歩いて見たが、都市再開発がなされ、一部川のほとりの倉庫などが取りこわれ、新しいビルが建てられようとしていた。まさに、USWAの国際担当の言われるとおり「百聞は一見に如かず」であった。ピッツバーク国際空港は聞いていたとおり広大な立派な空港で、トヨタのアドロン車が展示されており、うれしくなり写真をとってきた。

ケンタッキー州のレキシントン空港へ向う機上から見る風景は、広大な放牧場が広がっていて、サ

ラブレッド馬を想像した。小さな空港に到着したが、待っていてもタクシーが来ないので聞くと、電話して呼ぶのだと教えられた。その夜はハイアットホテルのレストランでウェイトレスの進めるままに注文したが半分も食べなかった。

久しぶりに我が家に電話したが、長くしゃべったと思ってもしゃべい八ドル程度の電話代であった。

☆地元にとけ込みともに発展し続けるTMM

五月十九日（金）朝食後TMMの斉藤副社長に電話したらゲートを間違わないように来てくださいということに安堵した。レキシントンからタクシーで三十分程度のところにジョージタウンのトヨタ・ケンタッキー工場がある。タクシーの運転手が色々と話しかけてきて、今、自分は古いカローラに乗っているが故障しないとか、トヨタが新しい工場を他に造るということが地元紙に載ったが本当かと言われ、話しているうちにTMMに到着した。午前十時半の約束でメインゲートから入り、オフィスの受付嬢に告げると斉藤さんが「十亀さんどうもどうも」と顔を見せた。ビジネスに来て待ち合わせの人が、「あれが購買担当のMr・斉藤VPである」とささやいているのが聞こえた。これは、かなりの名の知られた実力者だなあとも思った。

応接室に案内され、始めの話題は日米自動車交渉の対日制裁リストのトヨタレクサスシリーズで、もしも実施されればトヨタへの影響は一番大きいと言っていた。現地の新聞に載っていた意見広告の二万人余りの影響ではすまされないのではないかとも言った。同席していた中西勉コーディネーターがTMMの概要について説明してくれた。

一九八八年に品質確認第一号車をラインオフにして、今では年産四十万台の生産能力があり、カムリ、セプター、アバロン車を造っているとのことでした。従業員も六〇〇〇人おり、出勤率は非常に良く、品質第一のJ・D・パワー社ゴールドプラント賞を三回も受賞している。そして、現地調達率も七十七%ぐらいまで上っているとのことであった。この州からは第十六代リンカーン大統領や作曲家のフォスター、ボクシングのモハメッド・アリが出ている所であると言っていた。

それでは、工場見学は後にしてあまり混まないうちにと、カフェテリア方式のメニュー豊富な工場給食に案内された。

その後の工場見学には、工場内部品運搬車を工場見学用に改造したようなオープンな車で第一組立ラインを中心に、運転手と日本人案内係の女性がたんねんに案内してくれた。見た感じでは働いている人は比較的若く、勤勉なように思えた。地元州民の採用は九十六%で、うち女性が二十五%いるとのことであった。自働化も高そうなロボット等、最新鋭設備のラインスピードは五十五秒と比較的落ち着いた作業状況のように思えた。

見学後は夕食会を橘（日本料理店）でおこなうことを決めてトヨタのケンタッキー工場を後にした。レキシントンのホテル近くのダウンタウンを散歩していると、噴水が出ている小公園があり行ってみると、これはケンタッキーダービーで大金を手にした人が寄付したと記してあった。ルイスビルのケンタッキーダービーはあまりにも有名である。そうこうしていると約束の時間になり橘を訪れると、今年の三月までトヨタ本社の人事部にいた磯具匡志コーディネーターも顔を出して話しがはずんだ。今年三月に家族全員で来ているが、中学生になる子供の教育の問題が悩みの種であると言っていた。

斉藤VPは他の会合で遅くなると中西コーディネーターから聞かされていた。それからしばらくして斉藤さんが見えた頃には酔いづぶれかゝっていた。「地下にカラオケ、マージャンがやれるのでどうですか」と誘われたが、ケンタッキーバーボンを飲みながら現地の話を聞いた。前社長の張富士夫氏（現トヨタ自動車常務）は立派な方で地元とのつながりを良くするために、工場のあるジョージタウンに住むとか、従業員の出勤率向上にカムリの抽選会をするとか、年に一度のケンタッキーダービーに取り引き先を招待するとか、色々なくふうがなされている、という話を聞いた。夜もふけてきたので斉藤さんの愛車アバロンに乗せていただき、ホテルまで送ってもらった。

☆持つべきは親しい友達

五月二十日（土）はいよいよ最後の訪問地ロサンゼルスへ向けて出発するが、こムレキシントンからは成島氏とは別行動になり、岩崎氏と二人で本当に小さな十六人集りの飛行機でナッシュビルまで行き、乗り次いでロサンゼルス国際空港に到着した。宿泊したのはリトルトウキョウのニューオータニホテルであった。ホテル周辺を散策したが、二十一年前に比べれば、ずいぶんと変わっているように思えた。私の友達がU.S.トヨタ販売本部の近くのトランス市で、「大介」という日本食店を出しているの、そこへ電話すると奥さんが迎えに来てくれたので、岩崎氏を誘って店へ行った。店の中は日本人客で一杯だった。帰りも送るので待つてほしいといわれ、午後十一時頃にホテルへ帰った。

五月二十一日（日）は最後のロス見物、今回は現地の観光社に頼んで高級車でメキシコ街を見て、ハリウッドのチャイニーズシアターからビヴァリーヒルズ、そして海岸線のサンタモニカ、ベニス・

ビーチなど景色を見ながらの観光、ダウンタウンで最後の買物をして午後四時頃ホテルに帰った。部屋にメッセージが入って、昨夜の「大介」の店から「今夜もぜひ来てほしい、アメリカでの最後の夜をもてなしたい」というものであった。久しぶりのカラオケで店の人や若い女性で宴席が盛り上がった。ホテルに送ってもらったのは深夜午前一時過ぎだった。

五月二十二日（月）は楽しかったアメリカを見て歩くのも終り、日本へ帰るのみとなった。ベーカーリーショップで朝食をとり、午前十時に迎えに来た乗用車でロス国際空港に向った。

このアメリカ滞在十日間はあっという間に過ぎ、団体の海外旅行では味わえない思い出に残る数々のことを経験することができた。これもひとえにIMF・JCと岩崎、成島両氏のおかげであり感謝申し上げます。

持つべきは親しい友達であることを改めて痛感した。

香港 ポスト1997年華南経済圏を訪ねて



(財)中部産政研

願興寺 皓 之

〔プロフィール〕

がんこうじ ひろし (48歳)

- 1947年 愛知県生まれ
 - 1970年 トヨタ自動車工業入社 (現トヨタ自動車) 業務部(現、国内企画部) 経て
 - 1976年 トヨタ自工労組執行委員 (賃金対策部長、調査局長)
 - 1980年 国内企画部、調査室、経営企画部。
 - 1993年 中部産政研に出向 現在に至る
- 〈趣味〉 美術品鑑賞
〈好きな言葉〉 内省不疾夫何慍優

華南広州の朝は早い。六時にもなれば、車の警笛の間を縫う人と自転車のざわめきの中に人々のたくましい営みが始まる。朝粥一・五元、ラーメン二元、ちまき六角（一元〓十三円、十角〓一元）……暖かい香りの中に人、人、人の波が煙る。独特の臭いに包まれた清平市場へと足を運ぶ。見事にとぐろを巻いて昇天された毒蛇から猪狸猫犬……皮を剥がれてつぶらな瞳を動かす白（？）兎、そして名も知らぬ野菜や魚貝類から衣料品やアクセサリーまで、決して清潔とは言えない裸電球の路上から人の群の中へ消えていく。香港の女人街は対照的だ。素晴らしい偽ブランド品が明るい露店内一杯に並べられ、香港の庶民が集まる。金曜の夜ともなれば、若いお二人連れが楽しそうに散策する。明るく、そして豊かな素顔の香港だ。

地方からの労働者に厳しい就労制限を課す広州市、バリヤーを介して人民の流人に目を光らせる深圳。地方に住む人が、広州、深圳そして香港の豊かさに肌でふれる機会は、まず無いのだろう。

瀋陽に生まれた支敬は歌う。「一九九七快到巴、我就可以去香港、八百伴究竟是甚麻様……」（一九九七年早く来て、したら香港に行けるのよ、ヤオハンってどんな風……）。今「香港」は、中国の人々の胸に「まだ見ぬ邦」への思いをかき立てる。

確かに、深圳そして広州へと社会主義的市場経済化するわち「中国の香港化」は一定の成果を挙げた。されど、この流れが一九九七年香港の中国返還以降も、更に大きな流れを成して沿海部から中国全土へと拡がりを見せるのかどうか。香港政府の通産次官を務めるウォーレス劉氏は、一九九七年以

降も香港は「特別行政区」としての位置付けを保証されており、これまで通り、中国の政治・経済政策に左右されることなく、いや従来にも増して華南グレートチャイナのリーダーとして独自の役割を果たしていくと言い切り、これまでと何ら変わらないことを執拗なまでに強調する。

一人当り国内総生産が二十一千米ドル（九四年）と、宗主国イギリスの十七千米ドル（九四年）をしのぐ香港の豊かさは、仮に上海が今の成長力を二十年間持続してやっと到達できるレベルだと聞く。中国の人々が、この埋めようのない現実に目醒め、社会主義経済に対する疑問をいだく恐れが無いと言いつけるのだろうか。鄧小平以降、カリマス性を持たない北京政府は、彼等が依って立つ政権の基盤とも言うべき中国人民大衆の支持をとりつけるために、社会主義的市場経済化の中で香港の位置づけと役割を再考せざるをえない局面を早晚迎えるであろう。「北京からの距離に比例して北京政府の影は薄れる。法律は江（陽子江）を渡ってこない。」という発言を広州で耳にする。それだけに、北京政府には焦りもある。

ジャーディン・マセソンを率いるM・バロー氏にお会いする機会を得た。アヘン戦争から南京条約そして香港の永久（九十九年間）租借へと過去一世紀以上に亘って政商として君臨してきたジャーディンのトップとして、彼は今、北京政府と密たる関係を保ちながら、既に本社は香港からバミューダへ移すなど、来るべきリスクへの布石を着々と固めつつある。

おそらく、香港政府が強調するような政治・経済面でのフリーハンドは無いのかもしれない。鄧小平以降に政策が変化する可能性は十分あり得るだろう。しかし、しかし、香港政府の樂觀論に疑問を感じざるを得ないのと同様、香港はもう駄目だと見限るのも逆の意味で悲觀論にすぎないだろう。香港の海外からの投資比率は九十四年で三十%近く、先進工業地域の十五から二十%をかなり上回っている。これは経済の若さを示す指標として留意すべきであろう。さらに香港は、地理的に日本とアセアンの中間に位置し、時差からもニューヨークとロンドン市場の中継ができる立地にあるなど、引き続き世界の金融センターとして発展する条件を備えている。また、中国の市場経済化の流れが逆行する可能性も小さいであろう。噂される鄧小平後継者の中に過去の体制を想う保守勢力は存在しない。今中国で起きている様々な困難は、計画経済から市場経済への過渡期の現象を見ることもできよう。

この様に考えると、一九九七年以降、香港の政治・経済運営は今よりは多少、いや北京の事情によつてはかなり不自由になるかもしれないが、長期的に見れば、中国のサービス基地として引き続きその役割を拡大する方向を辿る可能性が強く、また中国の香港化も、幾度か調整の堰を経て過渡期の様々な困難を克服しながら、中国全土へと浸透していくのだろう。今回の華南経済視察、そしてそこでの広州と香港の様々な人々との出会いを通して、光と影、期待と不安の入り混じる九十七年香港返還直前の「華南」を実感できたように思う。

産政塾活動記録

第一回会合

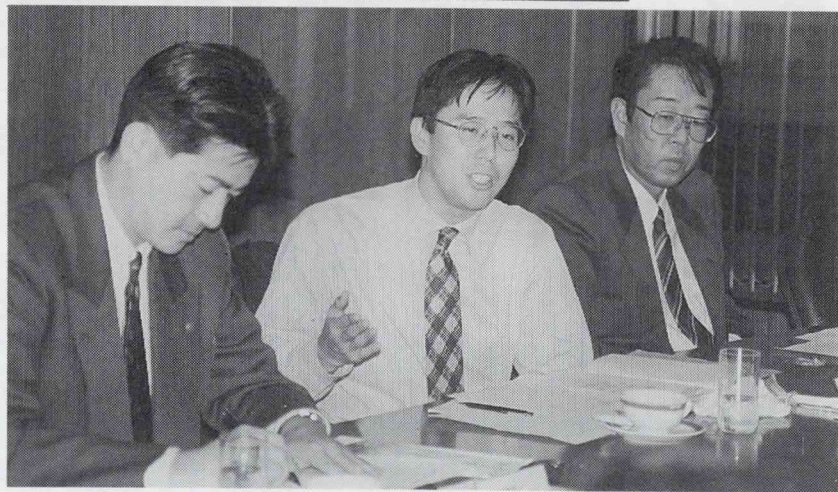
- ・日時 一九九四年十二月十二日(月)
- ・会場 愛知労済豊田会館三階 第二会議室
- ・内容 塾長 梅村志郎を囲んでの討論

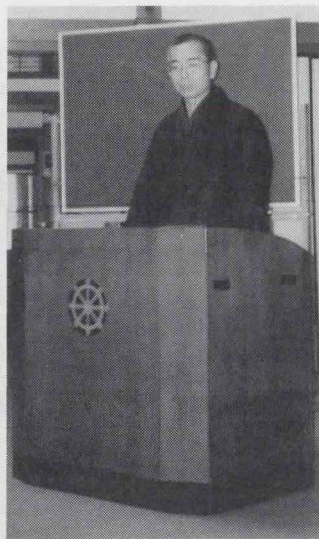
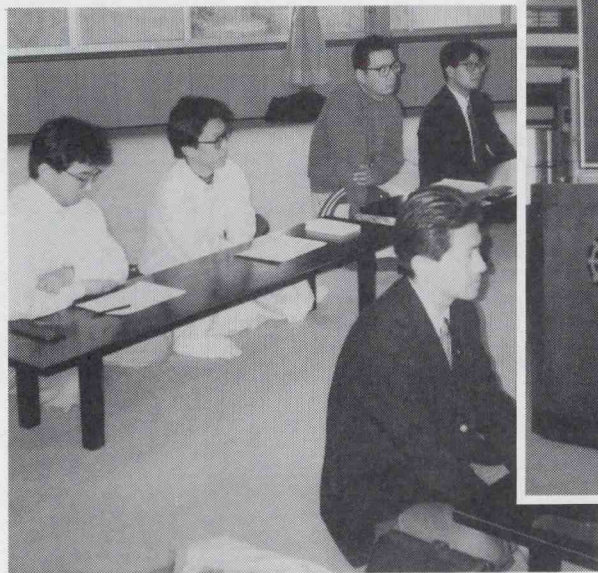
「二十年後の日本の姿、自分の生活」

第二回会合

- ・日時 一九九五年二月二十五日(土)
- ・会場 犬山継鹿尾山寂光院
- ・内容 山主 松平實胤氏を囲んで
講話 「日本人の可能性」







第三回会合

- ・日時 一九九五年四月二十八日(金)
- ・会場 名古屋市中区 リトルカーニバルにて
- ・内容 タイからの留学生 オン・アノンさんをお招きして
懇談 「日本人に何ができるのか」

第四回会合

- ・日時 一九九五年五月十六日(火)
- ・会場 中部電力健保会館にて
- ・内容 F E C 国際親善協会 埴岡和正氏をお招きして
放談 「国際協力とこれからの日本」



第五回会合

・日時 一九九五年七月七日(金)

・会場 丸栄栄町ビル カーネーションセンターにて

・内容 名古屋精神分析研究所 所長 青木滋昌氏を囲んで

「精神分析から見た親子・夫婦・一般対人関係について」
グループセラピーの体験

第六回会合

・日時 一九九五年八月九日(水)

・会場 トヨタ自動車(株)名古屋ビル会議室にて

・内容 野外活動研究会 主幹 岡本信也氏をお招きして

「超日常観察としてのフィールドワーク」について



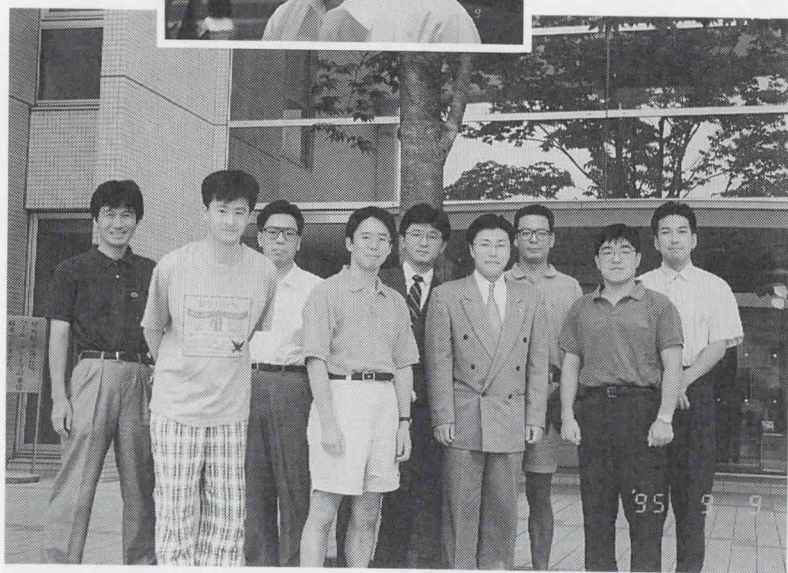
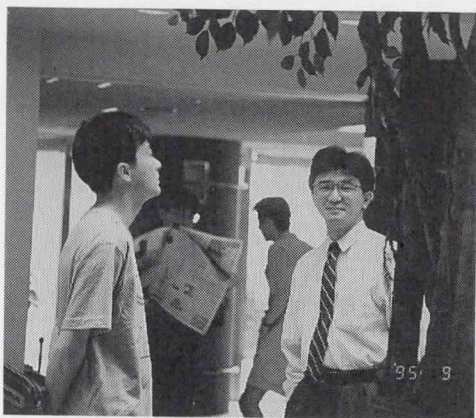
第七回会合

・日時 一九九五年九月八日(金)

・会場 トヨタ健保直営保養所セイラス蒲郡にて

・内容 塾長 梅村志郎を囲んで

シンポジウムの実践



あとがき

十一月二十日、アジア太平洋経済協力会議（A P E C）大阪会議が、各国首脳により「大阪宣言」が採択され幕を閉じた。この宣言は、先進工業国は今後二〇一〇年まで、途上国は二〇二〇年までにアジア太平洋における自由で開かれた貿易と投資を達成するための具体的な対応日程を定めたものだが、一部には特例を認める、認めないで玉虫色のところもあるが、総じてW T Oに先行して自由で開かれた貿易を達成しようというアジアの意気込みが感じられるものとなっている。

アメリカのクリントン大統領が内政問題で欠席だったこともあり白人国の影が薄い中で、世界の成長センターとしてのアジア各国の自信と自負を世界にむかってアピールする形になったといえよう。

最近の状況を考えると、こと自動車に関しても、もうアジア抜きにしては語れない時代に突入してきている。韓国のメーカーは欧州でシェアを伸ばし、マレーシアのプロトンは国内のみならず近隣国に輸出を始めるまでになった。タイを中心にアセアン地域での自動車部品の相互供給体制もできつつあり、何といっても今後の中国市場の帰趨をめぐって日本、欧州、アメリカの各カーメーカーがしのぎを削っている。

自動車部品メーカーに勤める自分の将来の働き方を考えると、十年くらい先にはアジアのどこかの国の現地工場でいろいろな国籍の人たちと働いているという姿も十分ありえる姿かもしれない。企業展開も日本人の生活もアジア抜きには成り立たない時代になってきている。

今回の第六期産政塾は「世界と日本・日本人」というテーマを念頭において活動を進めてきた。

寂光院の松平さんからは「日本人の可能性」ということで大江健三郎のノーベル賞受賞講演の「あまいまな日本の私」という演題を引きながら、和を尊しとする日本の風土、智慧を活かしながら世界に貢献できることがあるのではというお話をお聞きした。

タイの留学生のオン・アノンさんにはアジアの国の人から見た日本への率直な思い、期待を聞くことができた。

FECの埴岡さんからは、自ら進めてこられた国際親善の実践を通じての力強い信念と熱い想いというものを我々に示してくださった。

精神分析研究所の青木さんには幼児期、とりわけ三歳までの親子の関係がその子供の将来全般に深く関係しており、そこで満たされなかったことが将来に暗い影を落とすという驚きでもあり怖いことをうかがった。

野外活動研究会の岡本さんには、会社や組織を飛び出して自分の好きなこと、やってみたいことをとことん追求することの難しさや喜びということを教わった。また、会場を移してから遅くまで我々にお付き合いただき、人生全般にわたっての教えをいただいた。

一九九五年は一月の阪神淡路大震災に始まり、東京の地下鉄サリン事件、オウム真理教のさまざまな犯罪の発覚、銀行の経営破綻などいままで思いもよらなかったような事件が続発した一年だった。そうしたなかで最後まで自分を失わずに冷静に対処するための拠り所は、最後は自分の心の中で苦勞

しながら創りだした「信念」「心の強さ」しかないのかもしれない。

今回お会いしたそれぞれの先生がたにはそうした「信念」「心の強さ」を感じて止まない。はやく自分自身もそうした強さを身に付けたく思っている。

最後に、貴重な時間を割いて私たちの論議に参加してくださった講師の方々、忙しいにもかかわらず塾生を送りだしてくださった職場の方々、そしてユニークなキャラクターを引っ提げて参加してくださった塾生のみなさん、本当にありがとうございました。これをご縁にこれからもよろしくお願いいたします。

一九九五年十二月吉日

現在 仕事関係以外の人とのつながりが
非常に少なく、これは全体的流れの
中に自分が埋もれてしまう気がして、
全く異なる業種・考えの方と交流を持つ
ことで、今まで自分が「あたりまえ」
「しょうがない」と思っていた殻を
打ちやぶり、本当の自分らしさを確立
しているたい。

入社して10年が過ぎ、人事部3年
購買部9年を経験して会社の位置
づけ、組織での自分の役割等は解
ってかかりますが、ふと今後の自分と
いうものを考えてみると、仕事・家庭
社会との関わりなど再考すべき時
ではないかと認識しております。
自分の枠の中ではなく、先人や異業種
の方との物の考え方を書籍による情報
だけでなく、機会や意見交換する
場を得られる機会(座政塾)で
あるとお聞きし、是非参加させて
頂きたく、申し込みにしました。
「志政塾」が実現されることを期待す
し、参加させて頂きます。

以上

私たちを取り巻く政治・社会・経済の
情勢は、刻一刻と様相を変化させて
おり、私たちは常にそれに適応するべく
自己変革を図っていかなければなりませ
ん。労働組合役員として組織をリード
していく立場にあります私としては、他
にもまして自己研鑽を行っていかなけれ
ばならないと考えます。そこでこの座政塾
におきましては、様々なテーマに取り組み、
他組織のオマや社会の先輩のお話を
伺うことで、視野を拡張、人的ネットワーク
を構築し、自らの変革の糧としたいと思
います。

どうぞよろしくお願いいたします。

・自身の視野の拡大(人の交流、学び)
を目的として座政塾を選ばれた。
・これからの人生について参加する意義を、
これに学ぶ語りたいと思える。

入社して早、1つは自らの専攻の社員から
今年労働組合と1仕事は交代して、
いつか他産業の友人とぶつかる機会
も減り、酒民の村はがっかりなところ
といて「トコノ第2」の中に、
残っている様に思う。

近年、そういった風潮に対して、果業種
（田舎派）の重要性が認められており
「産政経」は、そういう機会を多く
とくいる場として、最近と考える。

同世代の果業種の、
何の利害関係も気にせず、
諸々のために、語り合ひ
—— 更に、塾の目的とあり
この刺激を求め
希望を望む。

社、塾長の梅村さんへ
接点を持つことも
今回中心となる、
一つ。

前向きに、
宜しくお付き合いを。

果業種の人達の考え方を
聞き、自分の視野を広げ、
今の自分をもう一度見つ
めなおしたい。

それによつて、新たな自分の
成長への基礎（パワー）
と見なしています。

さらに、会社人間になりつつ
ある自分からの脱却もあ
り、あらゆる方面への
アンテナをのびさせていき
たいと思ひ申し込ました。

直面する様々な課題に取り組む
果業種の方々との交流は、大変有
益だと考えます。

又これを持って、自社に新たな
吹き込みたいとも思います。

企業の本音を越え互人の交流に期待。
話し合いの中から新しい発見がぞろぞろ
と現れております。

入社して6年が経過し、会社にな
どぶくろとつかってしまつた気が
する。世の中広しと言えども私
こそが日本一の“井の中の蛙”
かもしれない。

こんなことを考えている時
産皮塾の存在を知った。
異業種の方々との交流の場は
私にとって“大海”を見る
又とない機会だと思う。

入社して早10余年、組織の中では中間管理役
として上司と部下の板挟み毎日。

ある時ふと気がついてみると自分の今度際、
範囲がいかにか狭く狭く狭く。淡々と
毎日の職務をこなすのではなく、自分自身を見つ
め直し、「仕事」「会社」「人生」と自分の今の
結論と進路を定めなくてはならない。海と
思い、短い人生に大見識を深めたい。
そのためには、同業種同士の情報交換では
不十分。井の中の蛙に過ぎない異業種も含め
た情報交換が必要。と思い、今回を機に、

異業種で働く同世代の方と
接することにより、自分という
ものの再発見と、自分の意見
を持ち、それを正確に伝える
手法を学びたいので、申し入
れました。

30回目の誕生日を迎え、ふと我に
帰って来る。新入社員の時からどれだけ
自分の世界が広がったのが、自分にどれだ
け人間的な中が在ったのが、

入社以来同じ仕事をしていると、理
かに仕事はやり易くなってくる。なにしろ
同じ人とばかりつき合っているのだから。
しかし、それでは自分の物の見方・考え方
が自然と狭くなっていくような気がする。

30才になった今、新しい人と出会い
新しい発想を得て自分の世界を広げ、
もう一度自分の仕事を見つめ直してみた
いと思い、今回入塾させていただこう
と思いました。

労務業務は、その性格上、社内中心の
業務である。それゆえ、発想や判断が社
内の価値観だけに左右される傾向に
ある。

今回、産政塾に参加することにより、
他業種の方との交流を深め、今まで経
験したことのない価値観に触れること
ができるものと期待している。

そして、この経験が今後の業務に
活みせるのではな...かと思う。

産 政 塾

1995年12月20日 第1刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471

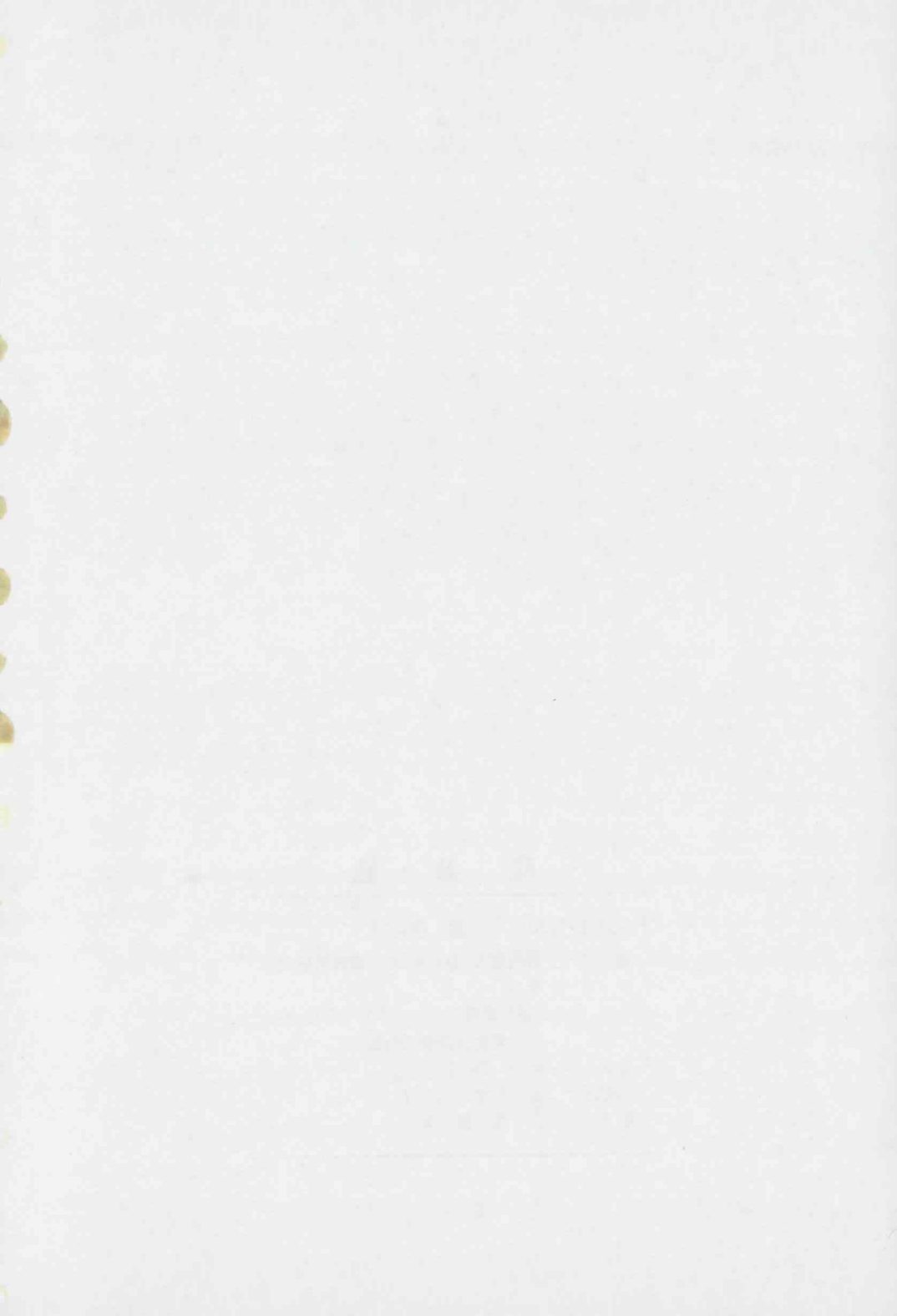
愛知県豊田市山之手 8 丁目131番地

愛知労済豊田会館

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本



塾 政 産

塾 長 梅村 志郎

塾 生

丸 栄 労 組	林 恭吾
中 部 電 力 ㈱	竹内 秀明
トヨタ車体 ㈱	近藤 均
アイシン 労 組	光岡 博
日 本 電 装 ㈱	向井 克之
トヨタ自動車 ㈱	説田 公人
松 坂 屋 労 組	中村 文彦
トヨタ自動車 労 組	高橋 誠
アイシン精機 ㈱	本田 武志
豊 田 合 成 ㈱	伊藤 裕章
名 古 屋 鉄 道 ㈱	大島 秀一
日 本 電 装 労 組	森 晴哉
㈱ 東 海 銀 行	横田 晴充
中 部 電 力 労 組	桑山 完治
全 トヨタ 労 連	石川 勝幸
㈱ 中 部 産 政 研	佐宗 正典

㈱ 中 部 産 政 研 十亀 義則

㈱ 中 部 産 政 研 願興寺 皓之